筑波大学新聞

第291号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
荻野祥三
TEL: 029(853)2040・6699
E-mail shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp
月刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

紙面から

3Eフォーラム　各部門の成果発表　2
エコステーション　資源ゴミを分別回収　2
ゴブリン博士ライト　吉祥寺でイベント　5
上杉隆講演会　本学勢が上位を独占　8
学生宿舎　メディアの在り方再考　10
学生から不満の声も　11
特集　6,7
旅立つアスリート
目標胸に次のステージへ
ミニ特集　3
退職教員
研究人生の歩みとこれから

藻類エネルギー研究

渡邉教授ら新藻類を発見

藻類による油生産へ一歩前進

渡邉信教授

炭化水素（オイル）をつくる藻類を栽培し、そこから油をとる研究で、本学の渡邉信教授（生命共存）らの研究グループが、今までに見つかっていた「ボトリオコッカス」に比べ、約12倍の効率で油を作る藻類を沖縄の海で発見した。

この発見は、昨年12月13、14日に本学で開催された、第1回アジア・オセアニア藻類イノベーションサミットで、産業化につなげる計画と併せて発表された。

新しく発見された藻類は「オーランチオキトリウム」。球形で直径5－15マイクロメートル。水中の有機物をもとに、化石燃料で言うところの重油に相当する炭化水素をつくり、細胞内にため込む性質を持つ。ボトリオコッカスに比べると、作る油の量は3分の1程度だが、繁殖する速度が36倍速いために、油の生産効率はこれまでの12倍にもなる。

渡邉教授は「量産法については、現在小さなスケールで研究が進行中。大規模に培養できるかは検証が必要」と話している。回収や処理といった油の生産コストは、ボトリオコッカスを使うと1㎏あたり約800円だったが、オーランチオキトリウムでは約50円と大幅に抑えられる可能性がある。

オーランチオキトリウムが作る油は、健康食品や化粧品などに使用される「スクアレン」を豊富に含む。そのため、燃料以外にも様々な用途が考えられ、付加価値が高い。

また、水処理プロセスに、ボトリオコッカスとオーランチオキトリウムを適用し、生活排水等を浄化しながら油を生産する、一石二鳥のプラントに関するプロジェクトも始まっている。

藻類エネルギーの研究は政府の新成長戦略にうたわれるライフ・イノベーション、グリーン・イノベーションの理念にも合致する。それだけに、今後本学の研究が日本の経済成長の柱の1つとなることが期待される。

渡邉教授は「今回の発見を受け、藻類から石油を生む研究の実用化のスピードは飛躍的に上がった。しかし、本当の実用化に向けては課題が山積している」と話した。

藻類エネルギーの研究では、本学は世界のトップを走っている。しかし、日本全体としては海外と比べて研究が遅れているのが現状だという。世界各国が開発にしのぎを削る中、これからの藻類研究を担う、若い世代の育成が急がれる。

本学生の研究

米新聞に掲載

本学のイ・ミンチョルさん（体科後期1年）の研究内容が、1月19日付の米紙「The New York Times」のコラムに「Phys Ed：Brains and Brawn」と題して紹介された。筋力トレーニングによって脳の認知機能が向上する可能性を、世界で初めて示唆したことが高く評価された。

この内容は、昨年11月13－17日に、米・サンディエゴで開催された第40回北米神経科学学会でイさんが発表したもの。研究ではラットを用い、体重の3割に相当する負荷をかけたランニング運動と通常のランニング運動を比較する実験を行った。その結果、負荷をかけたラットの運動量は減少するものの、遂行する仕事量は大幅に増加した。更には、脳の認知機能の向上や、脳内で記憶をつかさどる海馬で神経を新たにつくるたんぱく質とその作用の増大が見られることが分かった。

イさんの指導教官である征矢英昭教授（体育）は「海馬は、慢性ストレスやうつ病などで若い時でも萎縮することが分かっている。筋力トレーニングをすることで脳も同時に鍛え、たくましい心を養うことが、社会に出てからの大きな力となるだろう。そのために、大学での体育の授業を生かしてほしい」と本学生に語った。

つくば歳時記

センター試験当日。朝からたくさんの受験生が本学に足を運んだ。冷たく強い風のなか、緊張した面持ちで試験会場に向かった。春はもう、すぐそこまで来ているよ。（撮影・梅野なぎさ＝社会学類）

嘉納治五郎像除幕式

生誕150年を記念し設置

嘉納の理念を現代に

柔道の創始者で、本学の前身東京高等師範学校などの校長を務めた嘉納治五郎氏の銅像の除幕式が、昨年12月10日に大学会館前広場で開催された。この像は、嘉納氏の生誕150周年を記念して制作。式には山田信博学長や鈴木寛文部科学副大臣、旧制第五高等中学校時代に嘉納氏が校長を務めた熊本大学の谷口功学長らが出席した。

嘉納氏は近代柔道の創始者であり、アジアで初の国際オリンピック委員会委員を務め、日本のオリンピック・ムーブメントの推進に大きく貢献した。また、本学の前身である東京高等師範学校の校長を24年近く務めた教育者でもあり、「精力善用・自他共栄」の理念のもと日本の高等教育の発展に努めた。

山田学長は「嘉納氏は国際的な人材の養成や柔道の理念からも分かるように精神の発展に努めるなど、さまざまな分野で社会に貢献した。本学は嘉納氏の精神に倣い、よりよい人材を育成していきたい」と話した。

像の除幕は本学関係者や来賓によって行われた。像を覆う布が取り払われて、嘉納氏の雄姿が披露されると会場からは大きな拍手が起こった。

式を終え、嘉納氏の研究を行い、今回のプロジェクトにも携わった真田久教授（体育・教授）は、「嘉納氏の理念は、現在本学が進めているブランディング化に通じるものがある。今後も嘉納氏の理念に倣い、本学の方向性を模索していきたい」と話した。

この像は彫刻家で文化勲章受章者である朝倉文夫氏が1936年に制作したものの。「嘉納氏の偉業をたたえ、彼の功績や理念を今の時代に伝えていく」という思いのもと、筑波大学基金が個人や団体からの寄附を募り、本学の東京キャンパスと講道館に設置されている像と同じ型を用いて制作し、本学の大学会館前に設置した。

このプロジェクトは本年度をもって終了するが、今後は嘉納氏に関する書籍の出版活動や、シンポジウムの開催などを展開していく予定だ。

嘉納治五郎像と山田学長ら除幕式参加者たち

チュニジア政変

本学にも影響

本学は、チュニジアにある海外大学共同利用事務所に関する緊急声明を1月18日に発表した。その中で、チュニジアで昨年12月から続く一連の対政府抗議活動を受け、チュニジアにおける同事務所の活動を自粛していることを表明した。同事務所では、国内情勢の安定が確認出来次第、業務を再開するとしている。

チュニジアでは、昨年12月、生活のために行っていた野菜販売を摘発された若者が焼身自殺を図ったことを契機に、各地で高失業率問題への抗議行動が増加した。抗議活動は、次第にベン・アリー大統領（当時）の退陣を要求する反政府デモに発展し、1月14日には大統領がサウジアラビアに亡命、23年間に及ぶ独裁政権が崩壊した。これにより、ムバッザア暫定大統領を中心とする新政権が発足した。

◇

岩崎貞紀研究員（北アフリカ研究センター）によると、本学に在籍するチュニジア人留学生で母国への一時帰国をした学生はいない。また、岩崎研究員によれば、留学生の1人は「これまでは長期独裁政権を持つ自国に誇りを持てなかったが、今回の革命によって、チュニジアとその国民に誇りを持てるようになった」と、民衆が長期独裁政権を倒したことに対する喜びを口にしているという。

2月2日現在、政治体制は依然として予断を許さない状況にあるが、岩崎研究員によると、国民生活は徐々に落ち着きを取り戻してきているという情報が現地の研究者から届いているという。

筑波おろし

20世紀を代表するミュージシャンの一人、ジョン・レノンが凶弾に倒れて30年になる。彼の作品の中でも、世界平和を歌った「IMAGINE」は今なお世界中の街角から聴こえてくる▼実はこの歌、オノヨーコの詩集「グレープフルーツ」に影響されて創られた。だが作詞作曲にヨーコの名前は見当たらない。レノンはヨーコの名前を載せなかったことについて後日、「あの頃は身勝手だった」と反省している▼つくばで「IMAGINE」といえば、本学のスローガン「IMAGINE THE FUTURE」が思い浮かぶ。昨年4月に本格的に始まったブランディングプロジェクトが、学生や教職員への浸透がまだ足りていない感が否めない。参加を呼び掛けるも、積極的に参加してみようと思う人、拒絶反応を見せる人、そもそも無関心な人、という具合に対応は皆ばらばら▼何事も急ぎは禁物だ。特に大学一体となって行うプロジェクトはまず、互いの意思疎通が大切だ。1万人を越える人々が学び、働き、生活する本学である。多様な感性や能力を持った人々の中から、レノンの「IMAGINE」にとっての「グレープフルーツ」のような刺激が生まれるかもしれない。そうすればレノンの歌詞のように、「いつの日か、君も僕らに加われば、世界は1つに結ばれるだろう」。

第4回　つくば3Eフォーラム

タスクフォースの活動状況を報告

CO_2の大幅な削減が目標

新技術創出に期待高まる

第4回つくば3Eフォーラムが昨年12月12日、本学会館で開催された。

3Eフォーラムでは、専門家から構成されるプロジェクトチームである「タスクフォース」を設けている。「バイオマス」、「太陽エネルギー」、「都市構造・交通システム」、「エネルギーシステム・評価」の4つのタスクフォースがそれぞれ具体的な取り組みを行うことで、つくば市の二酸化炭素排出量削減を目指している。

3Eフォーラムは「2030年までにつくば市の二酸化炭素排出量を50%削減する（つくば3E宣言2007）」ことを目標として、これまでも活発な議論を戦わせてきた。

今回の会議では、各タスクフォースの活動状況が報告され、今後5年間のロードマップ案が提示された。今後は本会議を契機とした、タスクフォース間の競合、連携が進むことが考えられる。

「2030年の（二酸化炭素排出量削減）目標に向けて」をテーマとしたパネルディスカッションには、各タスクフォース座長のほか、森本浩一副学長（財務担当）、岡田久司つくば市副市長、五十嵐立青つくば市議会議員らがパネラーとして参加した。フォーラム議長の井上敏教授（構造生物）の司会のもと、意見交換が行われた。多くの意見が交わされる中で、「タスクフォース間協力を推進してほしい」といった市民の声も上がった。

鳩山前首相の25%削減」宣言や、環境省による「温室効果ガス2050年80%削減のためのビジョン」の発表など、温室効果ガス削減に関する国の目標設定が相次いでいる。これらを受けて、筑波研究学園都市として果たすべき役割を模索し、着実に行動に移していくつくば3Eフォーラムには、今後も大きな期待がかけられている。

井上教授は「つくば発の技術として、国際的に注目されるようになったバイオマスタスクフォースの藻類エネルギーのような技術や取り組みが、他のタスクフォースからも出てきてほしい。そのためには、全体をシステムとして管理する仕組みと、人材が必要であると強く感じている」と話した。

パネラーとして発言する五十嵐市議

研究成果発表フォーラム

最先端研究を紹介

山海教授らが発表

本学で初の試みとなる「第1回筑波大学研究成果発表フォーラム2010―IMAGINE THE FUTURE．未来構想大学を目指す最先端研究の展開」が、昨年12月1日に東京国際フォーラム（東京・千代田区）で行われた。

本フォーラムは、本学のこれまでの研究活動とその成果を社会に分かりやすく情報発信するための活動の一環として開催された。

ロボットスーツ・HALを開発した山海嘉之教授（知機）、睡眠と覚醒について研究する柳沢正史教授（分子コア）など、4人の本学研究者が自身の最先端研究を発表し、ポスターセッションを行ったほか、1973年にノーベル物理学賞を受賞した江崎玲於奈本学元学長による特別講演も行われた。また、特徴ある人材育成プログラムについてなど、本学に関する紹介も行われた。

フォーラムには、企業や大学、官庁、自治体関係者など250人以上が参加した。本学の研究活動等に対する学外からの関心の高さがうかがえ、充実した研究発表となった。

メッセージソング収録

約50人が参加

本学のメッセージソング「IMAGINE THE FUTURE～未来を想え」の公開収録が昨年12月23日大学会館ホールで行われ、山田信博学長をはじめ学生、教職員及び卒業生の有志約50人が参加した。

メッセージソングは、本学のブランディング戦略の一環として、「IMAGINE THE FUTURE」のスローガンとともに本学第一期生でコピーライターの一倉宏氏が作詞し、同じく本学OBの吉川洋一郎氏が作曲した。

約3時間かけた収録の最後には、一倉氏、吉川氏らとともに当日集まったスタッフ全員がステージに上がりメッセージソングを歌い上げた。

エコステーションオープニングセレモニー

学内ゴミの分別回収を実施

生活環境改善が狙い

学内から出たゴミを分別し保管するスペースとして設置されたエコステーションのオープニングセレモニーが、昨年12月3日に体芸エリアで行われた。

セレモニーでは、エコステーションの施設の紹介、森本浩一副学長（財務・施設担当）とつくばエコシティ推進グループ長の井上敏教授（構造生物）による挨拶、体育、芸術専門学群の学生によるエコステーションプロジェクトの説明が行われた。参加者にはペットボトル飲料が振る舞われ、飲み終えたペットボトルで回収のデモンストレーションが行われた。

エコステーションが設置されたのは5C棟の北側。有償で処分されている学内ゴミのうち、売却出来るリサイクル可能なものを、より確実に分別保管するためのスペースとして設置された。学内の古紙、ペットボトル、ペットボトルキャップ、カン、ビン等を回収しており、学生と教職員は誰でも利用することが出来る。

プロジェクトの発起人である栗本宣和準研究員（体育科学系）がエコステーションプロジェクトを提案したのは今から2年前。高校でゴミの分別の指導をすると、生徒たちが移動教室の際に節電も意識し始めたことに気付いたのがきっかけだった。運営は昨年9月から始まり、体育や芸専の学生も運営に参加している。エコステーションでのゴミの分別を通して、学生一人ひとりがゴミ処理環境を見直し、資源の分別回収を通して生活環境の改善につなげていくことが狙いだ。今後は体芸エリアだけではなく、全学に設置していく方針だ。

栗本準研究員は、「環境に配慮する気持ちはみな持っている。その気持ちを行動として表す場所に出来たら」と話した。

デモンストレーションを行う参加者

旧春日庁舎借用

本学の施設として利用

外国人向けのコーナーも

つくば市の旧春日庁舎を借り受け、本学の施設として新設した春日プラザが、昨年11月、本格的に利用を開始した。同プラザは本学活動の情報発信、関係者の活動や福祉・生活支援などを目的に開設された。

同施設は4階建て。1階に国際交流コーナーと日本語教室、2階に附属病院職員向けの保育施設、3、4階に世界遺産等攻研究室や共用会議室が配置され、すでに利用を開始している。今後、基金事業やつくば市との連携事業での利用が予定されている。

中でも国際交流コーナーは、本学をはじめ、研究学園都市全体の外国人研究者やその家族と留学生の家族を対象に、日常生活の情報提供や相談対応を英語で行っている。また、市の外国人向け発行物を揃え、必要に応じて市と利用者の仲介もするなど、行政との橋渡しをしている。

今回の庁舎借用は、昨年5月のつくば市新庁舎完成に伴うもの。空き庁舎となった春日庁舎活用のために市から本学に打診があり、実現した。借用期間は平成27年度まで。

春日プラザの国際交流コーナー

つくば臨床検査教育・研究センター

企業と連携し開設

検体検査の受託可能に

本学は三菱化学メディエンス（東京・港区）との産学連携事業として「つくば臨床検査教育・研究センター」を開設した。昨年12月3日に開所式が行われ、先月から運営を開始した。

大学と企業が連携し、臨床検査関連業務や教育・研究支援を一体的に行うのは、施設として国内初の試み。

同センターは、本学附属病院および周辺医療機関などからの検体検査業務の受託を行い、1日最大5000件の検体検査が可能。これまで本学で検体検査を行う場合、東京などの遠隔地にある検査機関に委託・輸送する必要があった。同センターが開所されることにより、輸送にかかる時間やコストを大幅に削減することが出来る。

また、同センターは人材育成の拠点としても機能する方針だ。本学の医学類・医療科学類生の卒前研修や、全国の医療機関から受け入れた臨床検査技師に対する教育・研究支援などに活用される。

同センターの開所により、本学附属病院の医療機能の補完、地域医療に対する貢献が見込まれる。

投資判断分析コンペ

本学チーム優勝果たす

プレゼン力の高さを評価

次代の投資プロフェッショナルとして活躍が期待される学生の育成を目的として、企業分析の手腕を競うグローバル・インベストメント・リサーチ・チャレンジ2010の国内決勝大会が昨年12月10日にトムソン・ロイター・カンファレンスルーム（東京・港区）で開催され、本学のMBA―Bチームが優勝した。チームのメンバーは大野忠士教授（国経）の下で学ぶ院生2年の5人。今大会では主要大学計10チームが出場。大会では、共通の企業の説明会をもとに各チームが投資判断などを分析し、その質やプレゼンテーションなどが審査の対象となる。

本学チームは、綿密な資料作りに加え、限られた時間のなかでのプレゼンテーション力の高さを評価された。

今後は日本代表としてアジア太平洋地区大会に、世界大会出場権をかけて挑戦する。

MBA―Bチームの水井好光さん（国経2年）は、「時間の制約はあったが絶対に勝ち抜くという意志を共有できた結果。日本代表として頑張りたい」と大会への意気込みを語った。

HALレンタル開始

医療・介護向けに

本学の山海嘉之教授（知機）がCEOを務めるサイバーダイン（本社＝つくば市学園南）が、福祉目的の歩行支援ロボット「ロボットスーツHAL福祉用」を医療機関や介護施設向けにレンタル販売を始めた。関彰商事（筑西市）がレンタル事業を取り次ぎ、茨城、福島、栃木の3県に展開する。

「ロボットスーツHAL福祉用」は、同社の「ロボットスーツHAL」の下半身部分を、足が不自由な人の自立歩行支援に利用したもの。人間が筋肉を動かす際に発生する電気信号をセンサーが感知し、モーターを動かすことで脚の動きをサポートする仕組みだ。

芳賀純氏（はがじゅん＝本学名誉教授）1月18日、死去。79歳。喪主は長男・馨さん。

1978年本学文芸・言語学系教授。

藤伊正氏（ふじい・ただし＝本学名誉教授）1月30日、死去。78歳。喪主は妻・邦子さん。

1985年本学生物科学系教授。

退職教員インタビュー

研究人生の原点とこれから

今年度もお世話になった先生方が退職される。勉強以外にもたくさんのことを教えて下さり、自身も研究やその他の活動に打ち込んできた。退職される先生方に、学生へのメッセージと第二の人生への思いを語っていただいた。（本紙・田中里奈、堀木陽子＝人文学類、小川玲、小宅優美＝社会学類）

自ら学ぶ姿勢大切に

小笠原憲四郎教授（古生物学）

定年とともに始まる、故郷徳島での、念願の半農半漁の生活が近づいてきた小笠原憲四郎教授（地球進化）の目は輝く。「退職教員インタビュー」ということでいささかの寂しさを予想していたが、「ほっとしています」と語る教授は、新しい生活への期待でいっぱいだ。漁船で海に出て魚を釣り、畑を耕し野菜を作る。新築した家に帰れはジャズを聴きつつこけしをめでる……といっても、地質学者を引退するわけではない。今までの論文や専門書を徳島の博物館に寄贈し、自らも研究員を務める予定だ。

教授の専門は新生代の貝類の研究。幼少期から化石と関わってきたが、研究人生を振り返り特に感慨深いのは、日本中の貝類の情報を集めた大規模な「タイプ標本のデータベース」の編集者を務め、完成させた事だ。タイプ標本とはその種を同定する基本となる標本。1万5千種の標本を調べ上げ約8年で作成。他の研究と並行し、毎日4時間睡眠で深夜に調べたという苦労の結晶だ。学名を検索すれば詳細情報をすぐ得られ、新しい研究の大きな支えとなっている。日本古生物学会の会長も務め、最近では75周年記念の式典で海外の著名な学者を招きシンポジウムを開くなど古生物学の振興に尽力した。

国内外の多くの地を調査したが、ロシアでの研究は印象深いという。日露の比較研究や、サハリンやカムチャッカ半島でキャンプ生活をしつつ調査し極東の新生代の化石を初めて明らかにした。長期滞在ですっかりロシア通になり露語も操る。現地の友人も得た。

本学では学群1年生から院生まで幅広く教えた。専門教育に特化していない分野専門性は弱いが、総合力や柔軟性に優れた人材が育っている」と本学生の印象を語る。一方、専門知識を学ぼうとする意志が弱いと指摘する。「教えてもらおうという考えの人は伸びない。自ら学ぼうとする姿勢が大事」と訴える。そんな教授のもとで育った学生は優秀で、卒業後も熱心に研究に携わっているという。

「地層は地球のメモリーカード。地層を見れば地球の歴史を解明できる」と語る小笠原教授。同時に、過去を見ることは未来にもつながるという。「例えば現代は温暖化で騒がれているが、同じ現象は過去何度もあり、地球の歴史からみれば微々たるもの。過去の似たような現象の因果関係や過程を調べれば未来予測も可能になる。過去・現在・未来全てに通じる学問」と魅力を語る。

少年時代、近所の大学生に教えられ、実家の裏山の化石採取に熱中したのが、研究人生の原点。その熱意は冷めることなく探究心を突き動かし続け、数々の成果を生んだ。「好きな事が段々発展し、良い先生にも巡り合い、気付いたら大学の教授にまでなっていた。そういう人生でした」と満足気に語る。好きな分野にとことん向き合う姿勢が成功を導いた。退職後の夢の生活と共に、化石への夢は更に広がり続ける。（堀木）

開かれた扉見極めて

林啓子教授（成人看護学）

糖尿病と笑い。一見関係の無いように見えるが、林啓子教授（看護専攻）の研究では、両者は深く関わっている。それは何故か。林教授は「笑いには、病気を防ぐ免疫の作用を高めたり、体の調子を整えたりする効果がある。糖尿病に関しては、血糖の上昇を抑える効果がある」と語る。一般にも笑いは副作用のない最良の薬と言われているが、その効果は糖尿病の回復にも現れる。そのため、糖尿病の研究をしていた教授は笑いの研究も始めた。

最初は笑いが及ぼす影響を調べていたが、このごろの患者はバラエティー番組を見ても笑わないことに気づく。それは、糖尿病患者の笑いのつぼがずれているところにあったため、笑わせ方を考えるようになった。

自分で顔に刺激を与え笑ったのと同じようにすることで実際笑うのと同じ効果が得られると気付いた教授は、「笑み筋体操」を開発した。「笑み筋体操」とは自分の手で顔の筋肉を動かし、通常とは逆の経路から笑いの神経を刺激する体操である。メディアで取り上げられるようになり、介護、子育ての場で使われるなどの広がりも見せている。活動の広がりの中で、吉本興業と仕事をすることもあるという。

林教授の研究範囲は、大学の枠をどんどん越えていった。そして、健康づくり支援等を行う「株式会社らふえる」を立ち上げ、代表取締役を務めたりするなど健康に関する幅広い活動を精力的に行っている。

教授は、初めから研究者になろうと思った訳ではない。本学附属病院に臨床看護師として15年間勤務した。だが、本学で新しく看護学類を立ち上げるときに、博士課程に入らないかと当時の副学長から声をかけられ、研究の道に進むこととなった。

教授は年齢的な定年まではまだあと7、8年ある。だが、「ベンチャー企業の方に力を入れたい。また、臨床が好きなので多くの患者と触れ合う仕事に戻ろうと思った」との理由から早期退職を決めた。これからも本学と連携し、共同研究や教育を支援する。今行っているストレスレスキューというストレス軽減装置の研究も続ける。「頑張って70歳までは活動をしたい」と意気込む。

「『棚からぼた餅』で今まで生きてきた」と振り返る。教授にとってのぼた餅は副学長に声をかけられたこと。「ぼた餅を拾うのにも能力が必要。それを逃さないために基礎体力、基礎学力、人脈が大事」と学生に向け語った。（田中）

「自分のスタイル」買け

出口正義教授（法学）

筑波大のどこからでも見える、日本百名山の一つ筑波山。しかし、筑波大で研究し、学ぶ多くの人にとってのその山は、単なる景観に過ぎなかったのではないだろうか。出口正義教授（法学専攻）にとっての筑波山は特別な存在だった。筑波山麓地域の文化再生・振興に取り組む人文・社会科学研究科のプロジェクト「筑波山ルネッサンス」に関わり、会社法や保険を専門とする自身の研究の傍ら地域の活性化に携わってきた。

筑波山、宝篋山をいただく常陸の地には、貴重な歴史的・文化的資源が散在している。それにも関わらず、筑波大学は建学から30数年、海外や国の中央ばかりを指向した研究をし、そんな地域の「宝物」に目を向けてこなかった。つくばは「人間性の失われた街」であってはならない。誇れる科学技術と歴史・文化を融合することで、大学と地域社会の共生を図ろう、つくばをよりよい街にしよう、と仲間と共に立ち上がることにした。

地域の異業種交流会に出かけて行き、市民を相手にプロジェクトの趣旨を説明しても、最初はけげん顔をされるだけだった。だが「筑波は日光・鎌倉にも負けない土地だ」などと語りかけるうちに、頑なだった住民たちとも打ち解けた。シンポジウムや講演会を開催し、学生が参加できるワークショップも行った。09年には、北条商店街が中小企業庁「新・がんばる商店街77選」に選ばれるなど、特殊講義」を受けたことだった。魅力ある授業を展開する担当教員に憧れ、猛勉強。教員としての道を歩むことに決めた。

最近は安定志向の学生が多いのが気になる。千葉県館山の海辺で育った。サザエやアワビなど、良い獲物を獲るには、潮の流れの速い危険な岩場に行かなければならない。「リスクを冒さなければ、得られないものもある。学生には、自分のスタイルを大事に恐れず挑戦し、行動しながら考えてもらいたい。大学に対しては大学の変革により、人心が不安定になっている。江戸時代に町人文化が花開いたように、平穏な環境があってこそ、良い研究が生まれてくる」と教員や学生が研究に集中出来る環境を提供するよう訴える。

退職後は、筑波山ルネッサンス」の活動を通してできた仲間との縁を大事にしながら、専門の研究を続けていく。その合間に出来るだけゆかりの土地を訪れ、人々との絆を再確認しつつ、自分の「心のよすが」を辿る旅をするつもりだ。（小川）

考えるための読書を

黒古一夫教授（近現代文学）

図書館の本を全て読破した小学生時代、初の柔道部出身の生徒会長を務めた中学生時代……。黒古一夫教授（図情メ）の原点にはいつも身近にあり影響を与えてきた「本」の存在がある。

黒古教授は近現代の社会と文学がどのように関わってきたのかをテーマに近現代の文学を研究してきた。代表作は「村上春樹『喪失』の物語から『転換』の物語へ」や「村上龍『危機』に抗する想像力」など。「思う存分やりたいことができた」と図書館情報大学時代から勤めてきた本学での18年間を満足げに振り返る。

黒古教授が大学生時代を過ごしたのは、1960年代の終わりから70年代の初めで、「大学闘争」の時代であった。バリケード封鎖が思いっきり。高校はバスケ部、大学はゴルフ部と、学生時代は筋金入りの体育会系だった。上智大学法学部での学生時代、「勉強はあまりしていなかった」と笑う。転機は4年次に「商法特殊講義」を受けたことだった。魅力ある授業を展開する担当教員に憧れ、猛勉強。教員としての道を歩むことに決めた。

激動の大学生時代を過ごした黒古教授。今の大学生に目を向けると、豊かなゆえすぎた社会の中でその場の物語から『転換』の物語へ」や「村上龍『危機』に抗する想像力」など。「思う存分やりたいことができた」と図書館情報大学時代から勤めてきた本学での18年間を満足げに振り返る。

黒古教授が大学生時代を過ごしたのは、1960年代の終わりから70年代の初めで、「大学闘争」の時代であった。バリケード封鎖が思いっきり。高校はバスケ部、大学はゴルフ部と、学生時代は筋金入りの体育会系だった。上智大学法学部での学生時代、「勉強はあまりしていなかった」と笑う。転機は4年次に「商法特殊講義」を受けたことだった。魅力ある授業を展開する担当教員に憧れ、猛勉強。教員としての道を歩むことに決めた。

最近は安定志向の学生が多いのが気になる。千葉県館山の海辺で育った。サザエやアワビなど、良い獲物を獲るには、潮の流れの速い危険な岩場に行かなければならない。「リスクを冒さなければ、得られないものもある。学生には、自分のスタイルを大事に恐れず挑戦し、行動しながら考えて行われている大学が多い一方で、「『あなたはもう忘れたかしら』で始まるかぐや姫の純愛フォークソング「神田川」に歌われているような世界が広がる、日本の高度成長期のまっただなかの時代だった。演劇部と文学研究会に所属し、毎月四千円という自分が稼ぐアルバイト代の約半分にあたる金額を実家へ仕送りしながら忙しい大学生活を送った。「授業も出ず、大学に泊まり込んで演劇の準備をした。先生も友達も色々な人がいて面白かった。疾風怒濤の時代だった」と振り返る。また、「妻とは大学時代に知り合った。平穏無事な時代だったら結婚なんかしたろうから、感謝している」と付け加えた。

激動の大学生時代を過ごした黒古教授。今の大学生に目を向けると、豊かなゆえすぎた社会の中でその場の物語から『転換』の物語へ」や「村上龍『危機』に抗する想像力」など。「思う存分やりたいことができた」と図書館情報大学時代から勤めてきた本学での18年間を満足げに振り返る。

黒古教授が大学生時代を過ごしたのは、1960年代の終わりから70年代の初めで、「大学闘争」の時代であった。バリケード封鎖が思いっきり。高校はバスケ部、大学はゴルフ部と、学生時代は筋金入りの体育会系だった。上智大学法学部での学生時代、「勉強はあまりしていなかった」と笑う。転機は4年次に「商法特殊講義」を受けたことだった。魅力ある授業を展開する担当教員に憧れ、猛勉強。教員としての道を歩むことに決めた。

最近は安定志向の学生が多いのが気になる。千葉県館山の海辺で育った。サザエやアワビなど、良い獲物を獲るには、潮の流れの速い危険な岩場に行かなければならない。「リスクを冒さなければ、得られないものもある。学生には、自分のスタイルを大事に恐れず挑戦し、行動しながら考えて行われている大学が多い一方で、「『あなたはもう忘れたかしら』で始まるかぐや姫の純愛フォークソング「神田川」に歌われているような世界が広がる、日本の高度成長期のまっただなかの時代だった。演劇部と文学研究会に所属し、毎月四千円という自分が稼ぐアルバイト代の約半分にあたる金額を実家へ仕送りしながら忙しい大学生活を送った。「授業も出ず、大学に泊まり込んで演劇の準備をした。先生も友達も色々な人がいて面白かった。疾風怒濤の時代だった」と振り返る。また、「妻とは大学時代に知り合った。平穏無事な時代だったら結婚なんかしたろうから、感謝している」と付け加えた。

激動の大学生時代を過ごした黒古教授。今の大学生に目を向けると、豊かなゆえすぎた社会の中でその場

サンス」の活動を通してできた仲間との縁を大事にしながら、専門の研究を続けていく。その合間に出来るだけゆかりの土地を訪れ、人々との絆を再確認しつつ、自分の「心のよすが」を辿る旅をするつもりだ。（小川）

退職後は出版社から依頼を受けている原稿を執筆しながら、趣味の家庭菜園やジャム作りなども妻と2人で楽しむ予定だという。大学生に向けて「他者に対する関心・様々な物への好奇心を持ってほしい。そのためのアンテナを高く持つ訓練には読書が最適。『考える読書』をたくさんして欲しい」と話した。（小宅）

最終講義

2月3日現在明分

【人文社会科学研究科】◇出口正義「私の人生哲学」＝3月14日午後3時半、1D204【生命環境科学研究科】◇小笠原憲四郎「私の新生代貝類化石研究」＝3月19日午後2時半、総合研究棟B110【図書館情報メディア研究科】◇石井啓豊「図書館と図書館情報学の世界から」＝2月8日午後4時45分、春日エリア講堂◇黒古一夫「僕が出会った作家たち」＝2月18日午後3時15分、春日エリアメディアホール◇長谷部紀元「情報とシステム」2月23日午前10時10分、7A205

（筑波大学新聞調べ）

反射鏡

輝きを目指し人生を歩む

古野智之（社学4年）

拝啓15のあなたへ。お元気ですか。僕はいま、つくばからこの手紙を書いています。あなたが読むことができるかどうかは分からないけど、一生懸命書きます。

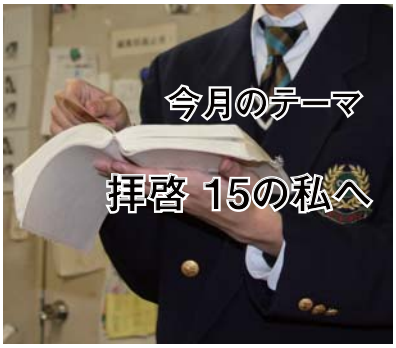
あなたはいま、何を考えていますか？受験勉強のことでしょうか。それとも部活のことですか。あるいは友人関係。もしかしたら、ずっと遠い将来のことでしょうか。いまは何も見えなくて内心は怯えているのかもしれませんね。それなのに周囲にそんなことを悟られまいと、必死で笑っているのかもしれません。心の中は不安でたまらないのに。

だけど、僕はそれを悪いとは思いません。分からないものは分からないのです。恐いものは恐いのです。当然です。大切なのは、どう次の一歩を踏み出すかじゃないでしょうか。今日はせっかくなので、僕からあなたに1つアドバイスを送りたいと思います。

「いつも輝いていなさい」

実はこれは僕のオリジナルの言葉ではありません。僕が心から尊敬する、ある社会人の方が下さった言葉です。

自分がいつでもキラキラと輝いているイメージを大切にしてください。それはどんなに苦しいとき、どんなにつらくて負けそうな時でもです。そんな時こそ、誰もが目を覆うぐらいの輝きを放つ自分を想像し、そのように行動してみてください。そうすれば、少しずつ新たな自分見えてくるものだ、その方はそうおっしゃっていました。



僕もまだまだ、これからの人間です。時には不安に押しつぶされそうになる時もあります。それでも前を向いていかなければなりません。一度きりの人生。素晴らしい人生にするのも後悔だらけの人生にするのも自分次第なのです。僕もあなたも今は、その岐路に立っています。輝く未来を信じて、歩いて行きましょう。敬具。

夢を見据えて未来へ踏み出す

小長谷達郎（生物2年）

15の君は大きな壁にはばまれて、きっと悩んでいたことだろう。生物学と本当にやりたいことと考え、それまでの部活を辞めて目指した生物部の設立。中高一貫校の生徒総会で否決されてしまったその夢は、恥ずかしさに姿を変え、君は自身をも否定しようとしたかもしれない。けれども、今の僕はそんな15の夢の上に生きているそして、やりたい事を意識し、それを真っ直ぐに目指した君を誇りに思っている。ふと鏡を見ると、夢から視線を逸らしている自分に気が付いた。いつの間にか成人を迎えた僕は、この重要な時期に何をすべきだろうか。いつかの君のように夢を見据え続け、そして一歩一歩足を踏み出していきたい。

幸せへの答え15の君への返信

牧野美咲（化学3年）

年末年始に帰省したとき、自室にある本棚の片隅で中学時代の卒業文集を見つけた。そういえば何を書いたっけぁとパラパラめくると、15歳の私はタイムリーなことに未来の自分宛てに手紙を書いていた。文末には未来の自分を試すかの如く、「あなたは今、幸せですか？」と問われていた。

当時の私は、幸せとはみんなから一目置かれちやほやされることだと思っていた。容姿に対してとてもコンプレックスを持っていたから、勉強だけは誰にも負けないようにしようと一大決心。その決意通り、常に学年で成績はトップで親にも先生にも友達にも褒められた。勉強で中学時代の卒業文集を見つけた。そういえば何を書いたっけぁとパラパラめくると、15歳の私はタイムリーなことに未来の自分宛てに手紙を書いていた。文末には未来の自分を試すかの如く、「あなたは今、幸せですか？」と問われていた。

当時の私は、幸せとはみんなから一目置かれちやほやされることだと思っていた。容姿に対してとてもコンプレックスを持っていたから、勉強だけは誰にも負けないようにしようと一大決心。その決意通り、常に学年で成績はトップで親にも先生にも友達にも褒められた。勉強で中学時代の卒業文集を見つけた。そういえば何を書いたっけぁとパラパラめくると、15歳の私はタイムリーなことに未来の自分宛てに手紙を書いていた。文末には未来の自分を試すかの如く、「あなたは今、幸せですか？」と問われていた。

当時の私は、幸せとはみんなから一目置かれちやほやされることだと思っていた。容姿に対して一目置かれる優越感によって私はアイデンティティを保っていたのである。しかし、そこに喜びはなかった。

あるのは人を蹴落とすことへの罪悪感と、やり切ったという完成のない苦しみだけだった。学内でトップだろうと上には上がいる。他人との比較は、永遠に終わることのない山登りと一緒だ。相対的な幸せというのは持続しない。一体、幸せというのはなんなのだろうか。

その答えは筑波大学での学生生活で導き出せた。

拝啓15の君へ。「私は今、幸せです」。

怨念にも似た思いは今もない。出るために本気の勇気が必要。

宿舎の部屋の寒さの理由すぐ分かった。それは窓の形のせい。でもどうして外もそんなに寒い？

残っているが、これだけは忘れないでほしい。自分を極端に過小評価し続けたのは、確かに愚かなことだった。しかし、それでも前に進み続けようとした姿勢は、決して間違っていなかったと思う。諦めていなかったから、1つのことに長年取り組むことの辛さも楽しさも、分からなかった。しかもその間、人の言うことを素直に聞き、方法を変え、練習し続けてきた。そのことに自信を持ってはいけない理由も、ましてや自分を責める必要も無かったと、勝手ながら今では思っている。

もう1つ、大事なことがあった。あの時諦めていたら、筑波大学吹奏楽団での、多くの人たちとの出会いは無かった。この団で過ごした時間がどんなに自分の人生の中で輝いているものかは、とても一言では表せない。だから、誇りを持って15の私へ言う。本当に感謝している。よくやった。

屈辱乗り越えた自分への誇り

猪熊隼人（国総3年）

あの時の経験を忘れたことはない。吹奏楽部に所属し、毎日のように楽器を吹いていたが、技量があまりにも伴っていなかった、15の私。顧問に「親に温室で育てられたんじゃないか？」と言われ、同期にあなたがいない方が合奏が良かったって言われたよと報告されることもあった。私を奮起させようとして言ったのだとは理解していた。そしてこう思った。できていないのだから、軽蔑されるのは当然だ。相手にそう言わせてしまった私が悪いのだ。恨みだければ自分を恨め、と。何を言われても甘受し、ひたすら練習した。しかし上手くいかず、また自分を責める。前に進むことの難しさに比べて自分を否定することは容易だったが、遂には自己否定に疲れ果てた。あまりに不毛だったし、不憫だった。結局どんなに肯定的に考えても、15の時に受けた幾つかの言葉は屈辱だった。一方で周りに多大な迷惑をかけ続けたという、この負い目が消えることは無い。

様々な価値観を持つ学生と交流して、いかに他人との比較が無意味であるのかを痛感した。自分自身が本当にやりたいと思えることをやる。馬鹿にされたっていい。金子みすゞさんの一句を拝借すれば、「みんな違って、みんないい」のだから。幸せは自分の中にあった。

拝啓15の君へ。「私は今、幸せです」。

良識持って利用を

筑波の中心でEyeを叫ぶ

ツイッターをご存知だろうか。そのとき思ったことや伝えたいことを、パソコンや携帯電話を用いて「ツイート」する（つぶやく）ことができる、インターネット上の簡易投稿サイトだ。140字以内で気軽に投稿できることから、政治家や会社社長から学生まで幅広く利用されているサービスである。そんなツイッター上で先月11日深夜、ある「事件」が起きた。

ある都内のホテルの飲食店でアルバイトをしていた女子大生が、有名人が来店したという情報を、有名人の実名を出してツイッターに書き込んだ。来店を暴露された男性が元サッカー日本代表、女性が人気モデルであることから、ネット上では一時その話題で盛り上がったが、発信元がホテルの関係者であることから、「守秘義務違反だ」との批判がこの女子大生に集中。問題のツイートは深夜であったにもかかわらず、5時間後には彼女の働いていたホテル名に始まり、所属大学、本名、顔写真まで インターネット上にさらされた。現在では現住所や家族に関する個人情報、友人の個人情報の一部まで公開されている。

今回の事件では、さらされた個人情報の多くは本人がツイッターやミクシィなどインターネット上に載せたものであり、また一部のみ露呈された情報は関係者でなければ知り得ないものだ。善悪の判断はともかく、本人や周辺の人々のインターネット・リテラシーの欠如が批判され、個人情報をさらされる原因となったことは明白だ。

例えば、ツイッターやミクシィなどのサービスは実名で利用することも出来るが、個人情報が必要以上に特定されないよう、慎重な運用、自己管理が求められる。まったく当然のことではあるが、守秘義務を負うべき情報を載せてはいけない。他人の悪口を愚痴々と書き込むのもマナー違反だ。

また、この女子大生は、問題の書き込みをした後の対応も批判されている。謝罪することなくインターネット上から姿をくらませようとしたが、これは正しい判断とは言えない。悪いことをしてしまったときはすぐに自分の非を認め、丁寧に謝罪することが重要だ。

情報管理について、改めて考えるきっかけとなった今回の事件。情報の漏えいとも失う信用も大きく、インターネットを用いれば情報がすぐに世界中を駆け巡るこの2時世、個々人の良識と常識が求められているのだろう。（本紙・森田聡＝社会工学類）

留学生の目

フィリタリナ・アンナ

私は2010年10月1日に日本に来た。今はもう4カ月経った。4カ月で日常生活に慣れた。チューターがいなくても1人で何かを買うためにつくばセンターやカスミまで行けるようになった。日本に来る前にロシアのモスクワ市立教育大学の東洋語学部で3年間ぐらい日本語と日本文化を勉強した。つくばに来たばっかりの頃は、自分が言いたいことをうまく伝えられなかったが、今はもう言語の問題がないと思う。そして日常生活や観光、留学生センターの授業やスーパーで日本文化と触れても、おどろかないようにした。私にとって異例なことであっても、「異なる文化でも自分が受け入れるように頑張らなければ」と思った。

一番おどろいたところは日本の雰囲気、日本や日本文化について本を読んでも、映画を見ても、日本に来てみないと分からないと思う。

私はまだモスクワにいた時筑波大学の友達が「つくばの夜は寒い。暖かいパジャマを持って行った方がいい」と言った。パジャマ2枚を持ってきたが、2枚を着ても夜は本当に寒い。暖房がついていて、毛布も2枚あっても、寒いよ！夜だけではなく、朝も昼も寒い。毎朝目を覚まして、毛布の下から出たくない。雪の雲が空を抱きしめると風も弱くなる。他の留学生たちが「アンナはロシア人だから平気」と言ってるけど、「ロシア人なのに寒さに弱い！」と答えていつも笑われる。

日本の魔法にかけられて

今は筑波大学の辺でもたくさんの木の葉が緑色で、花が咲いています。夜の気温はマイナス3度しかドがらないのに、どうして寒さは厳しく感じられる？つくばには雪があまり降らないからかそれはロシア人に対して大ショック。「どうして冬に花が咲く？」と私が日本人に質問してみた。「冬の花だから」と答えられた。でもやはり分かりません。ロシアには冬には何も咲いていない。

次のショックは太陽が沈む時間。冬はいつも早いと分かっていて、秋の時も夜の6時くらい沈むのはびっくり。日本人の友達が「夏もそうだ」と言って、私は信じられないもの。ロシアの夏太陽が夜の11時に沈んで、朝の4時にまた上る。日本の夏太陽の光が足りなくなるかもしれない。

また雪のない冬の話。戻る。このような冬には慣れていない。モスクワに太陽の光がし暖かくなると雪が溶かされて、空気で春の匂いがする。日本には毎朝太陽が上がって、土を暖めて、春の匂いがする。夜がきて、暗くなって、もっと寒くなって、秋の匂いがする。日本の冬はモスクワの春と秋の間。

一番素敵なショックは月。上がるときすごく大きくて、オレンジ色で、まるでみかんみたい。空のトップまで上がって小さくなったり、真っ白くなったりする。そして上弦の月はモスクワから見ると英語の「C」のように立っていて、日本から見ると横になっている。小さいお皿とかルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」のチェシャ猫の笑顔のように見えている。チェシャ猫の体はもう消えて、月の笑顔しか残っていない。

やはり日本に来てみて感じたことは日本の雰囲気の魔法。（日日1年・ロシア）※原文のまま

■「時評」はお休みさせていただきました。

次号のテーマは新入生のみなさんへです

連絡先
TEL　029・853・6699
e-mail　shinbun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

「渋マガZ」公開生放送

本学から全国へ発信

THKの協力により実現
観客参加型企画も

NHKラジオ第1の番組「渋マガZ」が、筑波放送協会（THK）の全面協力のもと昨年12月19日に大学会館ホールで公開生放送された。「渋マガZ」は若者向けの情報バラエティ番組。今回の本学での収録が、同番組初のNHKスタジオ外での公開生放送だった。

THKは、昨年行われた第27回NHK全国大学放送コンテストで、全7部門中5部門に入賞。また、同番組のコーナー「キャンパス7」に出演したことなどをきっかけに、NHKとの交流があり、今回の公開生放送が決定した。

19時台のキャンパス7」のコーナーではTHKの会員らにより取材が行われ、筑波大学宇宙技術プロジェクト（STEP）とアカペラサークルDoo−wopの2つのサークルが紹介された。STEPは、高さ2㍍、直径10㌢のプラスチック素材のロケットを紹介。宇宙に関するクイズや豆知識で観客を楽しませた。Doo−wopからは6人組の混声バンド・響（こだま）が出演。久保田伸の「Missing」など2曲を披露し、会場を魅了した。

MCをつとめるTHK会員

20時台のコーナーには本学卒業生をメンバーに含むRAG FAIRがゲスト出演。中盤には、本学学生や職員の有志が本学イメージング「IMAGINE THE FUTURE〜未来を想え」を熱唱した。

21時台からはTHK自らが手がけたラジオドラマ「恋人はTHK」が放送された。続いて、観客参加型のラジオドラマ「あなたもTOGETHER★THK」を放送。THK会員の合図で観客も拍手や掛け声で収録に参加し、会場は大いに盛り上がりを見せた。

THKの加藤朝陽さん（生資2年）は、「NHKとの共演でプロの仕事を間近で見る良い体験となった。普段あまり生放送をしないので、観客のリアクションを見ながら出来て良かった」と話した。

「ゴブリン博士」

吉祥寺でイベント開催
色鮮やかに壁面を飾る

「ゴブリン博士」こと小中大地さん（芸術前期2年）らがマスキングテープでゴブリンを壁に描いて展示するイベント、「ゴブリンたちのクリスマスーみんなのすきなもの」が、昨年11月26日から12月25日にかけて、アトレ吉祥寺（東京・武蔵野市）で行われた。このイベントは、10月に小中さんが別のイベントに参加したとき、小中さんの作品が今回のイベントを企画した人の目にとまったことがきっかけで実現した。

ゴブリンは、さまざまなものをモチーフに小中さんが作り出したキャラクター。今回は本学や武蔵野美術大の有志が「ゴブリン博士の助手」として、ともに制作を行った。店内の多くの壁面がさまざまなゴブリンで色彩豊かに飾られた。今回のイベントでは展示のほとんどが小中さんによる制作だったが、井の頭公園方面に抜ける通路の壁面では「ゴブリン博士の助手」たちが制作を行い、小中さんが手がけた壁面とは少し違った雰囲気を演出していた。公開期間中も制作は続けられ、変わりゆく壁面の芸術を、多くのお客さんや従業員が楽しんだ。

「ゴブリン博士の助手」の1人として、写真の撮影などを行った輪手亨さん（知識図書1年）は「大きな建物を埋めつくすのは大変だしすごいと思った。壁面の展示はお店もゴブリン博士も一緒に楽しめていい」と話した。

また、12月19日にはマスキングペイントのワークショップも開かれ、親子連れなど多くの人々が小中さんとともに制作活動を楽しんだ。

「ゴブリン博士」こと小中さんは「親子で制作を応援してくれたり、ワークショップで一緒に作ったりと、親子のコミュニケーションツールになっていた。助手たちが作った空間も自分が担当したところも、褒められるとすごく嬉しかった」と語った。

壁面を次々と彩る「ゴブリン博士」

第7回DC展

院生が41点展示
独創的な作品も

本学大学院人間総合科学研究科芸術専攻のうち、洋画・日本画・彫塑・書・総合造形の博士後期課程の学生15人による第7回DC展が、昨年12月28日から先月10日まで、茨城県つくば美術館（つくば市吾妻）で開かれた。41点の作品が展示され、期間中は1279人の来場者が訪れた。

DC展は人間総合科学研究科の学生が日頃の研究成果を発表する場であり、自身の研究内容を制作を通じて形にすることを目的としている。

展示されている作品の中で特に目を引いたのが、小田原のどかさん（芸術後期1年）によって制作された総合造形の作品。ガラス棒で下向きの矢印の輪郭を表現し、「彫刻」とは何かを考察した作品や、原稿用紙に鉛筆で「あなたは　あなたはいままさに、ここにいる　といっている。」と記し、アクリル板で挟んだ作品など、独創的な作品を展示した。

つくば市内から会場に訪れた男性は「作品のレベルの高さに驚いた。次回も来場したい」と感想を語った。

原点 GEN-TEN

「死」に関心集まるいま
宗教学が出来る社会貢献

津城寛文

宗教学を専門とする教師として、「原点」は何かと質問されれば、自分でものを考えるようになって以来、楽しく生きるのが苦手で「死」を考えることが多かったから、やがて「死」を説いている宗教に関心を持つようになったから、そして大学で宗教学という「学問」があるのを発見して、どうにか生きられる場所にようやく辿り着きました、という答えになるでしょうか。宗教学を専門とすることが私にとってありがたいのは、職業的に「死」を考え、語ることができることです。一般人がそんな縁起でもないことばかり話題にすると、KYとしてひんしゅくを買うに違いありません。

もっとも、「つねに死を思え」という格言のとおり、ある社会では、「死」を考えながら「生」を生きることは、異常なことではありませんでした。しかし、私が成長してきた期間の日本（経済成長からバブル崩壊まで）では、「死」を思うことは、物好きな少数者の倒錯か、せいぜい趣味のように受け取られていました。一般企業の面接で「趣味は仏教」と答えて、「若いのにお珍しい」と言われ不採用となったこと、死生観の話を「危険思想」と言われたこと、などを思い出します。

最近では、安くない「エンディングノート」や「遺言キット」が売れたり、「弔辞」が月刊誌の特集になったり、また宗教学では「死生学」が立ち上がり、医療でもターミナルケア、リビングウィルがテーマとなるなど、やや風向きが変わってきました。「死」をめぐる議論も、一般社会の広い関心を呼んでいます。私はずっと悩み続けている人生ですから、ある意味で（自他の）悩みを先取りしたような人生でもあり、しだいに年老いて死期が近付いてくると、むしろ気持ちが楽になり、「後楽」の格言を地で行くような、ありがたい人生（皮肉ではなく）のような気もしてきます。

大学改革の最中ですから、「そんな呑気なことで、社会や大学に貢献できるのか？」という話題が出そうですね。実は、「老い」の悩みや「死」の不安を知れず抱えた人は、私ような「悩みのプロ」の話を聞くことで不安が和らぐらしく、こういう話題はけっこう社会的な需要があるのです。また生きるのが苦手な若者にとっては、悩んだ人間は老後が楽になるという「実例」にもなるでしょう。そのような社会貢献の一環として、2010年秋、一般向けの啓蒙書『生前に書く「死去のご挨拶状」』を刊行しました。参考までに、ご一読ください。

つしろ・ひろふみ
1956年生まれ。筑波大学大学院人文社会科学研究科哲学・思想専攻教授。
東京大学農学部卒業、同大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専門課程単位取得退学。2003年より現職。専門は宗教学、日本文化研究。著書『霊』の探究』『公共宗教』の光と影』他。

私の一冊

山口恵里子

小宇宙への扉を開けて
コーネルの箱

チャールズ・シミック著、柴田元幸訳

ジョセフ・コーネル（1903−72）は、スケッチも彫刻もできずに、「箱の芸術家」になった。ニューヨークの古本屋や古道具屋をまわって、書物や映画のフィルム、写真、小物などを集め、それらを小さな箱に入れて、作品をつくった。ビー玉、楽譜、少年少女の絵、鳥の絵、蝶の切り抜き、スプーン…様々な物を組み合わせて、箱に収めたのである。例えば『無題（石鹸の泡セット）』には、ワイングラスに入った青い卵、彫像の子供の頭、陶製のパイプ、月の地図、人を乗せた馬の絵、斜塔と天体の絵が箱に並べられている。シュルレアリストとの出会いによって、コーネルはそうした作品をつくるようになったのだが、シュルレアリストたちが時代から置き去りにされた物に潜む革命的エネルギーを爆発させることを欲したとすれば（ベンヤミン、コーネルは物を新たな布置に置き入れて（星座のなかで星たちが輝くように）物そのものがもっていた輝きを瞬かせ、箱のなかに宇宙をつくりだした。ベオグラードで生まれ、アメリカに渡った詩人チャールズ・シミックは、その宇宙にあるいは寄り添い、あるいは対話し、あるいは迷い込みながら、コーネルの「玩具」を詩的オブジェにする。

シミックによれば、コーネルの箱のなかで石鹸の泡は「無限に会いに行った」のだった。そのとき、彼方のものが近くのものとふれあう瞬間に、宇宙が誕生し、コーネルの箱は芸術になる。シミックは「人を夢想に連ぶ乗り物を、どうやって組み立てるか。見る者の想像力を富ませ、生涯にわたって伴侶となるようなオブジェをいかにして作り上げるか」、これをめざしてコーネルは作品をつくったという。

シミックは、コーネルの箱は「床に置いてそのかたわらに横たわる」ことが理想的な眺め方かもしれないという。「箱は想像力が君臨していた日々の遺宝箱」である。横たわって箱を眺めると、時計や周囲に縛られているいつもとは異なる世界に連れて行かれるのかもしれない。子供のころ、海岸で拾った貝殻や、蝉の抜け殻、人形、消しゴムなどを集めて入れた箱や引き出しは、それだけで小さな、孤独な世界だった。その世界に降りていくよう、箱は置かれている。箱の扉は閉じられたままである。シミックの言葉は（そして柴田元幸の訳語も）扉を開ける手伝いをしてくれる。扉を開けてほしい、想像力のなかで、一人ひとりの宇宙のなかで。

昨年、佐倉市にある川村記念美術館で、「コーネル×高橋睦郎　箱宇宙を讃えて」展が開かれた。優しい手触りの紙を用いたフランス装のカタログは、購入者がペーパーナイフでページを切り開く作りになっている。高橋睦郎の詩とコーネルの箱が生み出した宇宙も素晴らしかった。高橋の詩「この世あるいは箱の人　ジョセフ・コーネルを讃えて」のなかの詩行、「この人はふと椅子から立ち上がり／落葉の中をゆっくりと降（お）りていく／それは地下の　箱にも似た彼だけの世界」―この言葉からかつて私は博士論文のある章を書き始めた。生涯にわたって伴侶となるであろう言葉である。（文芸春秋・2940円）

（現・准教授）

目標胸に 次のステージへ

今年も本学から多くのアスリートたちが巣立っていく。在学中は日本のトップアスリートとして練習に励んだ彼ら。次なるステージに進む彼らの軌跡と抱負を聞いた。（本紙・松本果奈＝人文学類、鈴木かおる＝比較文化学類、二宮健太＝社会学類、根津彩香＝国際総合学類、加藤茂行＝地球学類、福住勇矢＝物理学類）

主将として感謝の一年 決意を固めロンドンへ

粟野靖浩（柔道）

主将として臨んだ全日本柔道団体選手権大会決勝。手に汗握る接戦の末、東海大を下し、7年ぶりの優勝を果たした時、粟野靖浩（体専4年）の目からは涙がこぼれていた。1つ上の階級に出場した団体戦。力負けした部分があり、準決勝、決勝と続けて敗れた。チームに迷惑を掛けてしまい、主将として情けない自分に責任を感じていた。

「僕はメンタル的に弱い面があり、調子が悪い時に考え込んでしまう癖がある。3年生の時は、1年生の時に優勝した講道館杯で惨めな敗北を喫し、ショックで試合前にもかかわらず、やる気が全く出ない状態が続いた。

しかし、閉き直り臨んだグランドスラム東京大会で2位に入ると、その後のグランドスラム・パリ、モスクワ大会で3位。9月の世界選手権では3位、先月行われたワールドマスターズバクー大会でも3位に入った。そして7年ぶりの団体戦優勝。そこには主将として大学の看板を背負いながら経験を積み成長した粟野の姿があった。

粟野は卒業後、柔道部の先輩が多く在籍する了徳寺学園に入る。目標は来年のロンドン五輪の出場だが、彼の前には越えなければならない選手がいる。世界選手権の覇者で大学の先輩でもある秋本啓之（了徳寺学園・体育1年）だ。「秋本さんは高校時代からあこがれてきた先輩。いつもは先輩としてよく面倒をみてくれる」と粟野は語るが、試合では秋本の練習とは違う気迫や執念に圧倒されてしまう。しかし、枠が1つしかない五輪出場のために秋本は絶対に越えねばならない壁である。「次がラストチャンスのつもりで行く。」1年半後の五輪に向け粟野の決意は固い。（加藤）

全日本代表の姿に感銘 目指すは日本の守護神

久保侑生（ハンド）

守護神。そう形容するにふさわしい安定感で、男子ハンドボール部のゴールを守り続けて来た久保侑生（体専4年）が新たなステージへと進む。

関東学生ハンドボールリーグの優秀選手に選ばれる など活躍。4年次には次世代を担う選手によるNeo JAPANに選出された。全日本代表と合宿をし、「全日本代表の練習に対する意欲・意識の高さに感銘を受けた」と語る。

プロともなるとハンドボールのシュートは時速120キロを超える。その上巧みなフェイントが加わると、シュートを正めるのは至難の技だ。久保は「経験則に基づきシュートに反応している。ディフェンスとの連携も重要」と語る。

小学4年生の時、妹と一緒に練習を見に行き「楽しそう」と思い、ハンドボールを始めた。名門校、大分国際情報高校時代には、世代別の日本代表に選出されるなど、頭角を現した。その後、レベルの高い関東のチームと対戦するために本学に進学。1年次からベンチ入りするなど、順調なステップを踏んできた。

しかし2年次、突如スランプに陥った。「精神的に弱くなり、自分のプレーを見失ってしまった」。その後、ひたすら練習に打ち込みスランプから脱出。3、4年次には自分のプレーを貫くことができたという。「どうすれば上手くなるかを考えながらプレー出来るようになった。スランプを乗り越え久保は大きく成長した。

卒業後入社する大同特殊鋼（愛知）は、日本ハンドボールリーグで5連覇中の強豪。ディフェンスが堅くゴールキーパーは重要なポジションとなる。

今後の課題として久保は「体づくり」を挙げた。現在は身長186センチ、体重75キロと、アスリートとしてはやや細身。久保は「実業団でプレーするのに必要な筋力をつけたい。目標はプラス10キロ」と語る。

将来の目標は「全日本代表入り」。実業団入りはあくまで通過点に過ぎない。筑波の守護神から日本の守護神へ、期待が高まっている。（二宮）

胸の奥で燃える強い闘志 次のゴールへスタート切る

安孫子充裕（陸上）

ピストルが鳴る。スタートから頭一つ抜け出て、そのまま首位を譲らずゴール。2008年の北京オリンピックで日本代表として4×400メートルリレーに出場した安孫子充裕（体専4年）が追い求める100メートルの試合展開だ。400メートルも走れるが、花形の100メートルにこだわる。

身長171センチ。身長が高く、手足の長い欧米の選手と比べると決して恵まれた体型ではない。しかし、陸上に対する情熱は人一倍だ。大山圭悟監督（体育・講師）は「普段は闘志を表に出さない謙虚な選手。内には試合で発揮する情熱を秘めている」と評価する。

スポーツ選手につきものの大きな怪我の経験もない。怪我をするくらいなら練習を休み、体調管理を徹底している。「怪我で3カ月休むよりは、3日休む方がいい」と話す。

小学6年の時に、出場した市の大会で優勝。しかし、進んだ県大会では6位に終わる。その悔しさから、中学で陸上の世界に足を踏み入れた。中学時代には200メートルで全国3位となり、頭角を現していった。高校では科学的トレーニングでさらに実力を伸ばし、3年生のインターハイでは200メートルで初優勝を飾った。本学に入学後も順調に自己記録を更新し続けた。

しかし、順調だった陸上人生にも影が差す。3年の日本選手権で優勝を逃した直後のことだ。「大会直前に調子が悪くなり、それを境にやる気を無くしてしまった。走ることが嫌になった」と振り返る。優勝するために練習しすぎたことが原因だった。自分の思ったように走れないため、モチベーションが下がる悪循環に陥っていた。

不調を打破するきっかけになったのが、昨年11月に行われた広州アジア大会だ。4×100メートルリレーに出場したものの、急ぎ抜きのため次の走者とうまく連携がとれず、バトンを落としてしまうという苦い経験をした。しかし、「結果は良くなかったが、活躍している他の選手を見て、迷いを断とうと思った」と話す。不調に苦しむこと1年。過去の栄光に縛られず、初心に返ることを決めた。

春からは、実業団でさらなる高みを目指す。「目標はロンドン五輪。北京のように出場するだけではなく、自分の納得できる結果を出したい」と意気込む。復活を目指すスプリンターは、次のゴールへ向けて再スタートを切った。（鈴木）

「日本一」のチームをつなぐ 分析力が試合の決め手に

渡邉美穂（バレー）

2009年の全日本インカレの決勝戦。本学は嘉悦大を3−0で下し、6年ぶり6度目の優勝を手にした。「本当に嬉しかった」と目を輝かせて話す女子バレーボール部の前キャプテン渡邉美穂（体専4年）。渡邉にとって大学で最も忘れられない試合だ。「日本一になりたい」という願いから進学した本学で、夢がかなった瞬間だった。

優勝に大きく貢献したのが、渡邉の当時の3年生の成長だった。中西慶己監督（体育・准教授）は「渡邉は、3年生になってから試合戦略や自分のプレーに対する分析力が伸びた」と語る。

1年生からセッターとして活躍してきた。レシーバーからスパイカーにトスをつなぐセッターは、チームの攻撃の作戦を立てる重要なポジションでもある。「上級生になってからは、それを自分が一番やらなければならないなかったが、やりがいを感じていたと語る。

キャプテンになってからは「自分が中途半端だとチーム全体に影響が出る。自分が一番しっかりやろう」と気を引き締めた。しかし、最後の全日本インカレはベスト16という不本意な結果に終わった。それだけに「試合だけでなく日々の練習にも集中して、優勝を取り返してほしい」と後輩に期待を寄せる。

渡邉にとってバレーボールは「自分が最も打ち込めるもの。自分にはバレーボールがあるから他のことも頑張れる」。練習を理由に授業をおろそかにはしなかった。家族もそんな渡邉を支え、試合は毎回見に来てくれたという。

卒業後はNECレッドロケッツに所属する。「高校から実業団に進むことが多い中で大学バレーをアピールして」と中西監督は激励する。肩の下まで伸ばした黒髪をきりりと結って、新天地で活躍する姿を見られるのはもうすぐだ。（根津）

「考える剣道」で夢実現
筑波の良き伝統を体現

西村英久（剣道）

2009年の夏に念願の全国制覇を果たし、世界大会の候補選手にも挙がる、剣道部の西村英久（体専4年）。徐々に相手の間合いに入り込み〝その瞬間〟勢いよく打突（だとう）に入る彼の剣道には圧倒されるし、全国優勝を意識し始める。しかし面を脱ぐと一変、謙遜しつつインタビューに答える西村が現れる。

いじめられないようにと親から勧められ、小学3年で剣道を始めた。中学2年で全国個人3位に勝ち上がると、全国優勝を意識し始めた。高校のインターハイでは団体戦でこそ3位だったものの、個人戦で優勝という目標は叶わなかった。そんな中入ったのが、本学剣道部だった。

「筑波大は剣道の王道中の王道」。そう期待しての入部だったが、当時の部の雰囲気を「成績はいまいちだし、最悪」と振り返る。「ただ伝統を守るのではなく、良いものは残し、悪いものは変えていかなければ」という西村の意識からか、2年の後半には部の雰囲気が変わってきたという。

2年次は、西村にとってもう一つ大きな変化があった。故郷で開催された大分国体での経験だ。高校時代から地元チームで出場している国体を、西村は「Bランク大会」と位置づけてきた。「特に今回は地元大会。普通にやれば勝てるだろう」という幼い考えがあった。大分国体で西村のチームは3位に終わった。それでも地元の観客に大きな拍手で迎えられ、「背負っているものに気づいた」と試合に対する考え方が変わった。

さらに、大学という練習時間の限られた環境で西村が見出した「考える剣道」も織り込み、翌年、中学時代からの全国制覇という夢がようやく実現した。「でも、それに慢心してはいけない。後輩には自分で行動を表し、背中で見せられる先輩でありたい」と、日々後輩へのアドバイスも怠らない。「上下関係はしっかりしているけれど、たまには下級生を立てたり出来る筑波の良き伝統」を、西村は体現する。

そんな西村はこの春、筑波から熊本県警へと籍を移す。「平成の怪物」と呼ばれた剣道家・宮崎正裕（神奈川県警）を追うためだ。「大学とは環境が変わり、成績を残しにくくなる。その分、行動しきらなければいけない」。本当の夢への道のりは、これからが本番だ。（福住）

「一丸」でチーム支える
謙虚な姿勢で新たな挑戦

福士佳恵（バスケ）

「一丸～つながりを越え たつながり～」この言葉を目標に掲げた女子バスケットボール部は、今期トーナメント戦で準優勝、リーグ戦とインカレで第3位の成績を修めた。チームを引っ張ったのは、走力と得点力を兼ね備えるセンター、福士佳恵（体専4年）。「試合に出られるのは当たり前のことではない。ベンチにいる選手の分まで自分が頑張らなければ」と思っていた。

「一丸」となり、バスケ部を支えたエースは、WJBLのアインシンAWウィングスに活躍の場を移す。

福士がバスケを始めたのは小学3年だ。長身と優れた身体能力を持ち、名門・札幌山の手高校に進学した。「高校3年間が、自分のバスケットボール人生のターニングポイントだった」と福士は話す。恩師に出会い、技術だけでなく生活面においても指導を受けた。また、インターハイやU-18のメンバーとしてアジア大会に出場するなど、プレイヤーとして様々な経験を積んだ。

大学1、2年の頃はベンチで選手を応援する立場だった。また、上級生と意見が食い違い、理想とする動きが出来ないことに悩んだこともあった。「2年生のときは望まれるままのプレーをしていたが、学年が上がるにつれて自分のプレーをするようになった」と天高敏弘監督（体育・教授）は話す。

3、4年でレギュラーとなってからは、センターとして活躍し、昨年度のインカレでは、日本一に輝いた。今年のインカレでは主将の服部直子（同4年）が欠場。大黒柱不在の穴を埋めるべく、チームの要として得点し、3位の成績に導いた。自分のプレーを「パワーは無いが走ることが出来る。自分が勝るものを試合中に探し、そこを突く」と分析。

「バスケ部の仲間と出会い、過ごした時間が、大学生活で一番の思い出」と笑顔で話す。常にチームを思い、謙虚な姿勢を忘れない姿が印象的だった。（松本）

HELLO! 先端科学

幼少期に法定伝染病のワクチンを接種すると、病気の発症を防げる。同じように、予防接種でアレルギー性疾患の発症を防ぐことが出来る日が近いかもしれない。本学の島村道夫研究員（教物）、米ハーバード大学、英バーミンガム大学などの共同研究グループが、マウスの実験で、幼少期に投与することで成長後のアレルギー性気管支喘息にかかりにくくする物質を発見した。この研究成果は、昨年12月13日付の米医学誌、ジャーナル・オブ・クリニカル・インベスティゲーションの電子版に掲載された。

気管支喘息はさまざまな刺激物質で引き起こされる慢性的な気道の炎症による疾患。患者数は日本で約300万人、世界では3億人と推定される。治療は気管支拡張薬などによる対症療法が中心で、根本的な治療は難しいとされていた。

今回発見し実験に用いた物質は、ピロリ菌がつくるコレステロールの誘導体「コレステリルアンルグルコシド（ChAcG）」とインフルエンザウイルス。それぞれ幼少期のマウスに与えることで、アレルギー性気管支喘息にかかりにくくなることを証明した。

実験では、人間で乳幼児にあたる生後2週のマウスと、20歳前後にあたる生後8週のマウスのそれぞれにChAcGを与え、気管支喘息を起こすアレルゲンを5週後に投与した。生後2週のマウスでは成長後にアレルギー性気管支喘息にかかりにくくなるだけでなく、ほぼ発症しなかった。ChAcGの代わりにインフルエンザウイルスを用いた場合でも「同様の結果が得られた」。

この研究は、幼少期に病原体にさらされる機会が少ないと、成長後にアレルギー性疾患にかかりやすくなるという「衛生仮説」に基づいており、この仮説を支持する結果となった。

人間の免疫系には2種類ある。アレルゲンや毒素などの抗原に対して抗体を作って対抗するものを液性免疫、細胞内部に感染したウイルスやバクテリアを排除するために白血球などの細胞性免疫を発達させ、液性免疫とのバランスをとることでアレルギー性気管支喘息にかかりにくい免疫系を形成したと考えられる。

アレルギー予防薬
コレステロール誘導体等投与
気管支喘息の克服に期待

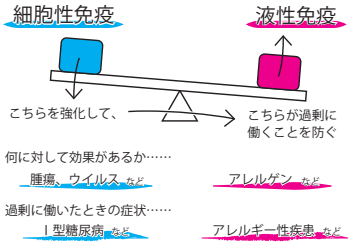
担当細胞が直接働きかけるものを細胞性免疫と呼ぶ。液性免疫と細胞性免疫は互いにシーソーの上に乗っているような関係にある。どちらかが過剰に働くと疾患を引き起こしやすくなる。アレルギーは液性免疫が過剰に働くことで起きるため、予防するには細胞性免疫がバランスよく働く必要がある。

今回の研究で用いたChAcGは、インフルエンザウイルス感染と同様に、リンパ球の1種を優先的に活性化させることで細胞性免疫を発達させ、液性免疫とのバランスをとることで花粉症や食物アレルギーなど、他の同じメカニズムのアレルギー性疾患全般にも有効だ。ヒトに投与するには安全でより有効性の高い化合物に近づけなくてはならないが、そう遠くない未来、様々なアレルギーの予防薬の開発が期待される」と話している。（本紙・森田聡＝社会工学類）

学者の島村研究員も大学時代は有機化学を専攻していた。その研究は「化学者でなければできない方法で生命現象の解明に貢献することが出来る」と語った。

島村研究員は今回の発見について「化学式などにも抵抗がない」という島村研究員の一人でバーミンガム大学のイラリオノフ博士は、ChAcGを島村研究員に紹介した有機合成化学の専門家。現在免疫

発見した物質の働き



光村図書出版 株式会社
渋谷恵さん

学びの大切さ再認識

初めまして。渋谷恵と申します。美術主専攻書コースに在籍しておりました。

時間軸で思い起こすと、まずは受験に挑んだ日のことから。

友人とともに新幹線で上京、常磐線とバスを乗り継いで向かう道中、実技試験に備え磨り溜めた墨がかばんの中で派手にこぼれ、2人で泣き笑いしながら掃除に勤しんだこと、これが筑波との最初の思い出です。

次に在学時、あの頃は人生の中で昼夜が最もなかった時代でした。深夜に公衆電話をかけに行っても学生が並んでいたり、「筑波銀座」とよばれた夜の繁華街でも知っている顔がこそこそにあったりと、「筑波時間」を堪能した4年間でした。昨年、久しぶりに大学を訪れた際に周辺を歩きましたが、現在は飲み会はセンター付近で行うことが多いと聞いた通り、かつての「筑波銀座」はちょっと寂しい光景に変わっていました。一方でパン屋など健在のお店もあり、嬉しくあちこちのお店に立ち寄りました。また、最も驚いたのは、街路樹の背がぐんと伸びていることでした。時間の流れの中で大学も街も成長・発展していることを実感しました。

現在、私は光村図書出版株式会社で、書写・書道の教科書の編集をしています。就職はバブル期でしたが、芸術出身でその恩恵を受けた人は少なかったのではないでしょうか。私は、書道と子供にかかわる仕事を希望しました。女子の枠はゼロと言われ肩を落として筑波に戻ることもありましたが、入社したいという強い気持ちをもてる会社を受験するときは、面接でも自分の言葉で語れた気がします。

教科書は、使う子供や生徒の人生に大きな影響を与えたりすることもある大きな役割を担ったものであると思います。編集の苦しみや責任の重さはありますが、完成したときの充足感は何物にも代えられないものです。また、大学での専攻がここで生きる仕事であることも思うと、墨をこぼしたあの日から、筑波とかかわりながら生きてきたことを再認識します。

最後に、皆さんに言えることがあるならば……

学生時代はすべてが学びの場です。でも、社会人になってからも学べることはたくさんあって、しかもそれは毎日現在進行形なのです。ということでしょうか。みなさんのこれからが充実した時間になりますように。

（平成2年度芸術専門学群美術主専攻卒）

スポーツの舞台裏　第16回　最大力の発揮

緊張をプラスに捉える　軽い運動で疲労回復

普段の練習では上手くいっていたのに、いざ本番になると緊張やプレッシャーによって失敗してしまう。誰しもそんな経験をしたことがあるのではないだろうか。トップアスリートでさえ、試合当日になると本来の力が出せずに成績不振に陥ることは珍しくない。「日本人の選手は海外の選手に比べて精神面が弱い。体力が劣っているとに、本来持っている能力を出し切れなければ世界では戦えない。日本のスポーツ界の強化には精神面の強化が必要になる」と本学の尾縣貢教授（体育）は語る。尾縣教授はコーチングを専門としており、「最大力の発揮」をテーマに研究を進めている。

2009年の世界陸上で優勝したウサイン・ボルトは、コース紹介の際に見せる、指を突き出して弓矢を射るようなパフォーマンスで有名になった。これは一見ただのパフォーマンスに見えるが、実はこの動きが「最大力の発揮」に大きく関係している。尾縣教授によると、海外選手は試合前に集中はしているが、マイナスになるような緊張はしていないことが多いという。競技を行う場所が世界の頂点であっても、その場所で自分の力を試せることを楽しむことが出来る。

ボルトのように、試合前後に派手なパフォーマンスを行う海外選手は少なくない。それに比べて、日本の選手は名前を呼ばれても応えず、カメラを向けられると下を向く人が目立つ。これは子どもの頃からのスポーツの取り組み方による違いが大きい。海外の選手は、アスリートとして周囲からの期待や重圧を感じるよりも、のびのびとスポーツを楽しむ。「民族性による違いを払拭することは難しい。しかし、極度の緊張であっても、それは脳が作り出したもの。自分で作り出しているからにはコントロール出来るはずだ」と尾縣教授は話す。

最大力の発揮には精神面の強化と並行し、日々の練習や激しい試合の後に疲労回復を行うことも重要だ。身体に疲労を残さないことがけがを予防し、その後の競技活動を低下させない鍵になる。近年では、完全休養よりもあえて積極的に体を動かすことが疲労回復への有効な手段であることがわかってきた。軽いジョギングなどは精神的なリフレッシュ効果もあり、家に閉じこもって休養するよりも疲労の蓄積を軽減出来るという。激しく使った筋肉を、行った運動と同じような形態で軽い強度で動かし、その後に疲労回復効果の高いストレッチングやマッサージ、あるいはアイシングを行うという方法が効果的だ。

一見、輝かしい舞台で活躍するアスリート達。しかしその裏側では、想像できないような恐怖や緊張と闘い、ここ一番で最大力を発揮することを目指している。研究の成果と現場が結びついて、更なる飛躍へつながることを期待したい。（本紙・梅野なぎさ＝社会学類）

全日本ラート選手権大会

本学５人が日本代表に

体操

第16回全日本ラート競技選手権が、昨年12月18日、19日につくばカピオ（つくば市竹園）で行われた。

男子の部では田村元延（体育2年）が個人総合部門で優勝し、3連覇を果たした。また、高橋靖彦（体育1年）は個人総合2位を獲得。本学勢が上位を独占する結果となった。

女子の部では堀場みのり（体育1年）が個人総合1位を獲得した。また、堀口文（体専2年）は直転部門で2位、跳躍部門で3位を獲得した。

田村は昨年6月に膝を負傷したが、大会までに調整を済ませ、本番では失敗の無い手堅い演技で高得点を挙げた。堀場は「今回は勝つことが出来たが、自分よりもレベルの高い選手はたくさんいる。難度の高い技を本番で成功させられるよう、出来る練習を最大限やっていきたい」と話した。

今大会は、今年5月にドイツのアルンスベルクで行われる、第9回世界ラート競技選手権大会の選考を兼ねており、本学から田村、高橋、堀場、堀口、三宅麻衣子（体専4年）の5名が日本代表に選ばれた。

本谷聡監督（体育・講師）は「調整が必要だが、世界の舞台でメダルを獲得出来る実力はある。女子にはまだまだ伸びしろが残っているので、これからレベルアップに繋げてほしい」と今後の期待を語った。

３連覇を達成した田村元延（写真提供＝体操部）

全日本インカレ

男子　守備固め３位　女子　ベスト16に終わる

バレー

大学バレーボールの頂点を決める全日本インカレが、昨年1月29日から12月5日にかけて東京体育館（東京・渋谷区）などで行われた。本学男子は3位、女子はベスト16で全日程を終えた。

■男子

男子はグループ戦を順調に勝ち進み、トーナメント戦では成美大と九州産業大にセットカウント3－0でストレート勝ちし、日本体育大にも3－2で勝利。3日の明治大戦でもセットカウント3－0で勝利し、4日の準決勝を迎えた。

準決勝の相手は中央大。第1セットを25－22で奪うが、次の2セットを続けて落とした。その後第4セットを25－15と大差で奪うが、第5セットは7－15で落とし、セットカウント2－3で惜敗。その後5日には3位決定戦で大阪商業大と対戦。「きつい試合だった」と都澤凡夫監督（体育・教授）は振り返るも、セットカウント3－2で勝利し4年ぶりに3位となった。

チームは秋季リーグ以降、課題となっていた守備の練習に力を入れてきた。また、下級生がチームの雰囲気に慣れてきたことも勝利につながった。都澤監督は「今年度は2部からのスタートだったが、まとまりのあるチームで選手が力を伸ばせた。来シーズンは今年に比べ若いチームになるが、可能性は大いにある」と期待を述べた。

個人賞は以下の通り。スパイク賞＝出渠田敬（体専1年）

■女子

昨年の全日本インカレで優勝した女子は、けがに苦しむ選手がいる中、グループ戦を順調に勝ち上がりトーナメント戦に臨んだ。

1日には静岡産業大を3－1、2日には中京大を3－0で下し、尚絅学院大戦を迎えた。序盤から競り合う試合となったが、セットカウント2－3で敗れた。

中西康二監督（体育・准教授）は「主力の4年生が抜けチームの雰囲気が大きく変わる。新しいチームでの準備を整え来シーズンに臨みたい」と抱負を語った。

◇

全日本バレーボール大学選抜男女東西対抗戦2010が、昨年12月11、12日に堺製鉄所新体育館（大阪府堺市）で行われた。本学からは椿山竜介（体専4年）と出渠田敬（同1年）が東軍男子で、渡邊美穂（同4年）、岩永麻里江（同1年）、高橋那依（同3年）が東軍女子で出場した。渡邊は東軍女子のキャプテンとして活躍し、中西監督が東軍女子の監督となった。

両日とも東軍がセットカウント3－1で勝利した。

個人賞は以下の通り。最優秀選手賞＝渡邊美穂▽リベロ賞＝岩永麻里江

◇

平成22年度天皇杯・皇后杯全日本バレーボール選手権大会ファイナルラウンドが昨年12月16－23日に国立代々木競技場体育館（東京・渋谷区）で開催され、本学女子が関東代表として出場。都道府県ラウンドとブロックラウンドを勝ち抜いた本学女子は、16日に近畿代表の三洋電機レッドソア（V・チャレンジリーグ所属）と対戦、セットカウント3－1で勝利した。同チームには5月の試合で0－3で負けていただけに「実力をつけた」と中西監督。続く17日には岡山シーガルス（V・プレミアリーグ所属）と対戦し善戦するも、0－3で敗れ準々決勝進出は果たせなかった。

記録ファイル

◆ラグビー　▽関東大学対抗戦A（昨年9月12日－12月5日、秩父宮ラグビー場ほか）＝5位（3勝4敗）▽大学選手権関東第5代表決定戦（同12月11日、ユアテックスタジアム仙台）筑波大62－0北海道大▽第47回全国大学ラグビーフットボール選手権大会（同12月19日－1月9日、県営熊谷ラグビー場ほか）筑波大27－33流通経済大

◆ハンドボール　第62回全日本総合ハンドボール選手権大会（1月19、20日、広島市東区スポーツセンター）【女子】1回戦　筑波大24－19徳山クラブ　準々決勝　筑波大11－29北國銀行

2010年度

体育会賞

【ダンス部】第23回全日本高校・大学ダンスフェスティバル神戸　文部科学大臣賞【男子バレーボール部】出渠田敬（体専1年）久原大輝（体専1年）前田一誠（体専1年）第15回アジアジュニア男子選手権大会　優勝【カヌークラブ】小野祐佳（体専2年）中野友貴（体専1年）第46回全日本学生カヌー選手権大会　女子カヤックシングル500㍍　優勝【空手道部】柴山恵理香（社学3年）第65回国民体育大会　優勝【バドミントン部】奥井智奈美（体専3年）住田有恵（体専3年）第4回女子野球ワールドカップ・チャレンジ2010　女子ダブルス　優勝【体操部】諏訪部和也（体育1年）第27回全日本エアロビック選手権大会　一般の部　男子シングル部門優勝／田村元延（体育2年）高橋靖彦（体育1年）World Team Cup 2位／堀口文（体専2年）全日本学生ラート競技選手権大会　個人総合女子　優勝／三宅麻衣子（体専4年）全日本学生ラート競技選手権大会　種目別・女子跳躍　優勝【陸上競技部】伊藤太一（体専4年）2010日本学生陸上競技個人選手権大会　三段跳　優勝／大室秀樹（体専2年）天皇賜杯第79回日本学生陸上競技対校選手権大会　110㍍H　優勝／吉邊直人（体専1年）世界ジュニア　走高跳　3位　2010日本学生陸上競技個人選手権大会　走高跳　優勝　日本ジュニア・ユース選手権　走高跳　優勝／保坂雄志郎（体専1年）日本ジュニア・ユース選手権　ハンマー投　優勝／中野瞳（体専2年）2010日本学生陸上競技個人選手権大会　100㍍　優勝／榎本優子（体専1年）アジアジュニア　棒高跳　2位／世古和（体専1年）日本ジュニア・ユース選手権　棒高跳　優勝／糸満めや（体専1年）2010日本学生陸上競技個人選手権大会　円盤投　優勝　アジアジュニア　ハンマー投　2位／世古和（体専1年）日本ジュニア・ユース選手権　100㍍　優勝【柔道部】全日本学生柔道体重別団体優勝大会　優勝／粟野靖浩（体専4年）柔道グランドスラム・東京2009　73㌔級　2位　スウォン柔道マスターズ2010　3位　柔道グランドスラム・パリ　3位　柔道グランドスラム・モスクワ　3位　世界柔道選手権2010東京大会　3位／西山大希（体専2年）柔道グランドスラム・東京2009　90㌔級　2位　ワールドカップ・ウィーン　優勝　柔道グランドスラム・リオデジャネイロ　3位　柔道グランドスラム・モスクワ　2位　世界柔道選手権2010東京大会　2位／緒方亜香里（体専2年）柔道グランドスラム・東京2009　78㌔級　優勝　柔道グランドスラム・パリ　優勝　柔道グランドスラム・リオデジャネイロ　2位　世界柔道選手権2010東京大会　優勝　第16回アジア競技大会柔道競技　3位／山本小百合（体専2年）柔道グランドスラム・東京2009　66㌔級　3位／小寺将史（体専2年）講道館杯全日本柔道体重別選手権大会　66㌔級　優勝／牧志津香（体専3年）講道館杯全日本柔道体重別選手権大会　57㌔級　優勝【トライアスロン部】樵浩平（体専1年）第12回日本学生トライアスロン選手権　優勝／2010ASTCアジアジュニアトライアスロン選手権　優勝／岡本優（体専4年）第65回国民体育大会水泳競技大会　成年男子3㍍飛板飛込　優勝　優勝【水泳部　飛込】第86回日本学生選手権水泳競技大会　男子3㍍板飛込　優勝　第86回日本選手権水泳競技大会　飛込競技　男子団体　優勝／岡本優（体専4年）第65回国民体育大会水泳競技大会　男子1㍍飛板飛込　優勝　2010年度室内選抜飛込競技大会兼国際大会代表選手選考会　男子3㍍シンクロ　優勝【水泳部　水球】志水佑介（体専4年）棚村克行（体専3年）第16回アジア競技大会　水球　3位【女子バレーボール部】第56回秩父宮妃賜杯全日本バレーボール大学女子選手権大会　優勝

本学体育会に所属し素晴らしい成績を残した選手・団体に贈られる、体育会賞が発表された。今年度も多くの選手が国内外で華々しい活躍を収めた。今年度は、とりわけ柔道部の活躍が目立ち、来年に開催されるロンドン五輪に向けて弾みをつけた。また、今年度本学に入学した1年生も目覚ましい成績を残し、期待の新星声邊直人（体専1年）や椿浩平（体専1年）らも受賞を果たした。来年度も多くの選手の活躍に期待したい。

柔道グランドスラム東京大会

西山が2位、緒方が3位に入る

本学から7人が出場
西山、決勝で惜敗喫す

柔道

柔道グランドスラム東京大会が昨年12月11―13日に東京体育館（東京・渋谷区）で開催された。本学からは西山雄希（体専1年）、緒方亜香里（同2年）ら7人が出場。西山が66キロ級で2位、緒方が78キロ級で3位入賞を果たした。

66キロ級の西山はこと最近国際大会での経験を積み実力をつけてきている。「調子は良かった」と語る西山は決勝でこの階級の全日本学生チャンピオンである中矢力（東海大）と対戦した。序盤は低い姿勢から技を仕掛ける中矢に対し、西山は上体が起き、後手に回る展開。残り時間も1分。中矢が仕掛けたところに西山が応戦し、激しい組み手争いになる。動きが止まったところに中矢の巴投げを受け、そのまま腕を極められ、そのまま一本負け。

優勝を逃した西山は、「昨年2度続けて敗れている相手。今回もまた同じような負け方をしてしまった。2月のヨーロッパ遠征でいい成績を収め、世界選手権の出場に繋げたい」と話した。

78キロ級の緒方は昨年に続く出場。前回は得意の寝技で一本を重ね、優勝を果たしている。今年も順調に勝ち進み、準々決勝で穴井さやか（ミキハウス）との日本人対決となる。試合は開始直後から立て続けに技を掛けられ、中盤には大内刈りで技有りを奪われてしまう。しかし、緒方は冷静に対処し、その直後、相手の体をひねりながら内股を極め一本勝ち。準決勝の相手はヤクエス（ベルギー）。開始直後から技を掛けるが決め手を欠く。最後は大外刈りから足を取られ一本負け。昨年に続く決勝進出はならなかった。

格下の相手に悔しい1敗を喫した緒方は、「受けが弱く、前に出るという姿勢が欠けていた」と反省を口にした。

今大会を振り返り増地克之監督（体育・講師）は「西山は外国人に対する試合運びの上手さを評価したい。緒方は大会や合宿での疲れのせいか、組み手が雑な部分があった。それぞれの課題を克服し、次の試合に臨んでほしい」と話した。

西山雄希

緒方亜香里

◇

柔道ワールドマスターズバクー大会が1月15、16日にアゼルバイジャンのバクーで開催された。本学からは5人が出場。小野皇志（了徳寺学園・体育2年）が90キロ級、粟野靖浩（体専4年）が73キロ級、緒方亜香里が78キロ級で3位入った。

73キロ級の粟野は昨年に続く出場。準々決勝ではウズベキスタンの選手を相手に、延長戦の末背負い投げで有効を奪い優勢勝ちを収め、準決勝に駒を進める。相手は世界ランク1位のワン・ギチュン（韓国）。苦手としている相手だが、粟野はワンの早い動きに上手く対応する。しかし、試合開始後1分、ワンが突然繰り出した体落としに反応できず一本。まんしてもワンの壁を越えられなかった。

試合を終え粟野は、「相手は、動きが素早く、なかなか崩れない。次からは先に組んで技をかけることを心掛けたい」と話した。

78キロ級の緒方の準決勝の相手は北京五輪金メダリストの楊秀麗（中国）。「最後まで自分の柔道ができなかった」と緒方が語る通り、試合は終始相手のペースで進む。試合中盤には消極的な組み方に立て続けに指導が2つ与えられ、そのまま試合は終了。

3位に終わった緒方は、「動きが硬かった。次のヨーロッパ遠征では自分らしい攻めを意識していきたい」と試合を振り返った。

大会を終え、増地監督は、「けが人も多いこともあり、非常に厳しい結果だった。調整不足の感が否めない」と話した。

■男子

関東8位の本学は、11月29日の1回戦では九州3位の日本経済大に73―61で勝利したが、続く12月2日の2回戦では関東3位の東海大に67―98で敗れ、ベスト16にとどまった。

吉田健司監督（体育・准教授）はシーズンを振り返り「怪我が多く苦しかった。今年の主力は2年生が多く下級生にも得点力があるので、来年は怪我を反省材料にしつつ上位を狙う」と語った。

その他大会の結果は以下の通り。

■女子

第77回皇后杯全日本総合バスケットボール選手権大会（1月2日―9日）。2回戦（初戦に当たる）、本学73―49順天堂大で勝利。3回戦、本学60―74シャンソンで敗北。ベスト16入り。

個人賞は、優秀選手賞、得点王＝福士佳恵

■男子

第86回関東大学バスケットボールリーグ戦（昨年9月4日から10月31日）。6勝12敗、10校中8位。1部残留をかけ入替戦に。

同入替戦（同11月9―11日）。1部8位の本学は2部3位の関東学院大と対戦。9日の第1戦では70―67、10日の第2戦では80―72と2連勝。1部残留が決定。

全日本大学バスケットボール選手権大会

女子 健闘し3位に
男子 怪我に苦しみ16強

バスケ

第62回全日本大学バスケットボール選手権大会が、女子は昨年11月23日―12月6日にかけてベイコム総合体育館（兵庫県尼崎市）で、男子は同11月29日―12月5日にかけて国立代々木競技場第二体育館（東京・渋谷区）開催された。女子は3位決定戦で松蔭大学を下し、第3位の成績を残した。

■女子

本学女子は武庫川女子大に勝ちベスト4に駒を進めたが、決勝戦進出をかけた拓殖大との戦いでは、序盤から連続得点で差をつけられた。第2ピリオド終了までには福士佳恵（体専4年）の活躍で4点差に追いつき、終盤まで接戦が続いたが、激闘の末に76―84で敗れた。「準決勝だけは意気込みが空回りしてしまった。ディフェンス中心の筑波らしい展開が出来なかった」と大高敏弘監督（体育・教授）は語る。

今大会では、チームの中心である服部亘子（同4年）が欠場。キャプテン不在のまま、インカレに臨むこととなった。大高監督は「服部はチームの柱。残りのメンバーで、彼女の分まで戦った」と話す。

迎えた3位決定戦の相手は、関東第2位の松蔭大。関東第3位の本学は、持ち味のディフェンスが生き、出だしから得点を挙げ、流れをつかんだ。第2ピリオドではイージーミスもあり一時は同点に追いつかれたが、38―37と本学のリードで前半を終える。後半戦では一進一退の攻防が続いたが、第4ピリオドで伊集南（同2年）のシュートを皮切りに、本学の猛攻が始まった。その後一気に松蔭大を突き放し、78―65で試合終了。第3位に輝いた。

全日本大学サッカー選手権大会

インカレ3位入賞果たす
土壇場で同点ゴール

サッカー

第59回全日本大学サッカー選手権大会が、昨年12月18日から今年1月5日まで平塚市競技場（神奈川県平塚市）などで行われた。本学は関東リーグ2位で出場、準決勝で敗退し第3位となった。

初戦で立命館大に勝利した本学は、東海リーグ1位の浜松大と対戦した。本学は前半32分に先制されたが後半9分に赤崎秀平（体専1年）のシュートで同点に追いつくが、後半30分に相手に1―0と勝ち越されてしまう。このまま試合終了かと思われた後半ロスタイム、赤崎が敵陣中央を突破して再びゴールを奪い得点は2―2、試合は延長戦へ。そのままPK戦に突入し、3―1で勝利した。

続く準決勝では、8年連続出場の強豪、関西大と対戦。瀬沼優司（同2年）のゴールで1―0とし前半を折り返すが、後半の相手の反撃をしのぎ切れず、連続ゴールを決められ1―2で逆転負けを喫した。関西大はその後決勝で中京大を破り、優勝を決めた。

風間八宏監督（体育・准教授）は「選手がシーズンを通してよく成長出来た。今後も一人ひとりの質を上げていきたい」と話した。

コーナーキックを蹴り込む小澤

関東女子学生剣道新人戦

劣勢覆し優勝

剣道

第11回関東女子学生剣道新人戦大会が12月4日、東京武道館（東京・足立区）で開催され、本学は3年ぶりの優勝を果たした。

この大会は大学1、2年生対象。第8回まで本学が連覇してきたが、ここ2年ほどは優勝を逃していた。今大会は準々決勝で法政大、準決勝で東海大を下し、本学は決勝に駒を進めた。決勝は国士舘大との対戦。先鋒の前田紫帆（体専1年）は試合開始すぐに面を取るが、その後は苦戦し、面を2本とられた。続く高梨奈々（同）は、立ち上がり直後に小手を取られたが、小手をとり返し引き分け。中堅の神坂友絵（同2年）も引き分けた。

本学が劣勢となる中、巻き返しのチャンスをつかんだのは副将の里井茜（同）。相手とせめぎ合う中、引き小手を奪い、本学と国士舘大との差を同点に持ち込んだ。大将選で山口美紀（同）が勢い良く攻め、開始40秒ほどで伸びのある面を取り、本学は主座を奪還した。

顔

喰うか、喰われるか。組み合ったまま相手の隙をうかがう。こうもという瞬間を捉えた時、その瞳はきらめく。

恒例の寒稽古が行われる早朝の柔道場には、選手たちの気迫が満ちている。そこに、日本代表の証、青い柔道着姿で練習相手と真剣に向き合う、森下純平（体専2年）の姿があった。昨年9月、柔道世界選手権東京大会の66キロ級で優勝。異例の抜てきだったためメディアの注目度は低かったが、代表として見事に日本勢の活躍に貢献した。

4月の体重別選手権では初戦敗退したにもかかわらず、世界選手権の代表に選ばれた。代表への選出は嬉しく思う半面「自分で良いのか」という思いが常にあったという。「体重別で）負けたのに選んだのだから、結果を出してこい」。代表に推薦してもらった日本代表の篠原信監督からは、そんな厳しい言葉も受けた。チャンスを貰ったからには、それを最大限に生かそうと前向きに考えることにした。

66キロ級期待の新星

森下純平（体専2年）

更なる高み目指して

「柔道は自分の人生そのもの」と言い切る。幼少の頃に始めた柔道は、自分とは切っても切り離せない。中学3年で全国優勝。スポーツの名門鶴ヶ丘高校2年のときにはインターハイを制した。本学を選んだのは、昔から憧れを抱いていたところが大きい。入学後は、世界ジュニアにおいてオール一本で優勝。さらに、シニアの国際大会、グランドスラム東京やワールドカップトビリシで3位に入賞した。成長が目覚ましい柔道部期待の星だ。

練習では日本柔道のトップが集い、日々刺激を受けるという。「大学の自由な練習環境が、何事も主体的に進める自分の性にあっている」と、練習中とは別人のように柔らかく微笑む。

几帳面で性格で「汚い部屋は嫌い」。その日の練習について、ノートに書きつける習慣がある。「柔道が好きだからこそ、ここまでやる」。その日に食べた物なども、書き留めている。毎日青汁を飲み、時折実家から届く野菜で自炊する。一人暮らしをする自身の健康管理に気を配っている。だが、休日には、友達と映画を観に行くなど、学生らしい一面もある。

世界選手権の結果は「優勝だった。しかし恭平は、この結果に慢心してはいないと。「安定して勝ち続けられるのが本当に強い選手。自分には（調子に）波がある」。

来年のロンドン五輪での金メダル獲得は、森下の中で、大きな目標だ。実力が拮抗する日本の66キロ級選手らを相手に「まず日本で勝つ」のが目下の目標だという。スタミナの不足など、課題はまだまだある。練習後にウェイトトレーニングを行うなど、努力の積み重ねを怠らない。

増地監督は「欲を言えば、もう少し無理をしてもらいたいが、自分のペースを持っているのは彼の良い所」と落ち着いてその成長を見守る。

もうダークホースとは呼ばせない。誰よりも柔道を愛する彼の不断の努力が実る時、その胸には金色のメダルが輝いているだろう。

（本紙・小川玲＝社会学類）

世界の教室から

ラトローブ大学（オーストラリア）

渡辺　晶

去年の3月から11月までオーストラリアのメルボルンで約9カ月間過ごし、前半は語学学校で英語を、後半は大学で経済学を学んだ。

私の通っていたラトローブ大学はシティからはバスで1時間くらいの場所にあった。道がなく、欧米風のかわいい家やさびれた雰囲気のお店が並んでいる、都市郊外でよく見かける街並み。バスを使わないと買い物も行けないし、最終バスの時間は早すぎるし、不便さも感じたけど、日本にいたときより時間に追われる事はなく、ゆるやかに生活することができた。

生活面でも勉強面でも大変なことは多かった。特に最初の1週間に感じた不安感は忘れられない。右も左も分からない初めての土地。加えて私は大学の寮に住んでいたが、みんな部屋の扉を閉めないし、音楽を信じられないくらい大音量で聞いている人はいるし、最初は部屋の外にあるトイレに行くのでさえもびくびくしながらだった。それでも数週間もすれば、生活にも慣れて仲の良い友達もできて「ことでなんとかやっていけるかも」と思えるようになった。

勉強面で一番大変だったのはディスカッションをしなければならない授業。特に大学ではオーストラリアの学生や英語の流暢なヨーロッパからの留学生も多く（アジア人、特に中国人も多かったけれど）、彼らは本当によく話すので、「何言ってるかよく分かんない」「特に自分に面白い意見がない」などと思いつつ話せないことも多かった。それでもきちんと準備をして授業に臨み、つたないながらも英語で発言して自分の考えを伝えることができた時は、充実感があった。

そんな中で学んだことのひとつは、当たり前のことだけれど、自分の意見・気持ちをしっかり言うことの大切さ。どんな意見でも発言をしないことは意見がないことになり、「分からない」と言わなければ分かっているということで話が進む。気を読んでもらおう、空気を読んでもらおうという考えは通用しないということが分かった。

大変だったことも楽しかったことも全部経験になって勉強になった留学生活。今ではすっかり日本の生活になじんでしまっているけど、学んだことは忘れないように、胸を張って「留学してきた」と言えるように、日本でも頑張っていきたい。（国総4年）

近くの観光地・バララットでの1枚

「空気読んで」は通用しない

上杉隆講演会

マスメディアの在り方再考

「真実は自分で確かめて」

フリージャーナリスト上杉隆氏の上杉隆氏を招いた講演会「マスメディアの現在『見せないメディアと魅せるニューメディア』」が先月20日に3A204で行われた。会場には約250人の学生や社会人がつめかけた。講演会の様子はUSTREAMで中継され、インターネットを通じて全国の人が参加した。またツイッターと連動し、会場のスクリーンに参加者のツイートが表示され、意見や質問を随時取り入れた。

第一部では上杉氏が「現代マスメディアの問題点と、ニューメディアの可能性」と題して講演。政治報道を例に、日本のメディアの特徴ともいえる記者クラブの問題を中心に語った。「政府発表の情報のみに頼る記者クラブにより国民が危険にさらされる可能性もある。」その「例」と指摘した。時折冗談を交えて話す上杉氏の話術に、会場では笑い声が響いた。

第二部では「メディア再考」と題したパネルディスカッションが行われた。本学教員の辻中豊教授（国日）、海後宗男准教授（国日）、荻野祥三特任教授（広報室）を交え、近年台頭してきたツイッターなどのソーシャルメディアについて議論した。最後に上杉氏が「メディアの情報はすべて疑い、自分で真実か確かめたほうがいい」とアドバイスした。

プランナーの船山裕貴さん（社学2年）は、「TACTを通して応援してくれる人に会えて良かった。メディアに関する見方を考えるきっかけを作ることができたと思う」と語った。

パネリストと議論する上杉氏（左）

副学長との懇親会

全代会と意見交換

日々の活動の成果見せる

全代会の活動や、学生生活の問題点について意見を交わし、学生の意向を大学運営に反映させる「副学長等と全学類、専門学群代表者会議構成員との懇談会」が昨年12月9日、第一エリア大食堂で行われた。今回の懇談会には学生65人、副学長、各学群・学類長など教職員64人が参加し、2時間にわたり活発な意見交換が行われた。

第一部では、平成22年度の活動中間報告が行われ、議長団と各委員長から、取り組んできた活動の成果が発表された。

第二部では、まず全学メーリングリストについての意見交換が行われた。全代会議長の田幡琢磨さん（人文2年）から「現在は大学から学生へ直接情報を伝える手段がなく、大事なことが伝わらない。メーリングリストを作ることで学生と大学の双方が利益を得るのではないか」という提案がなされた。これに対し、宇川彰副学長（企画評価・情報担当）は「メーリングリストは便利だが、セキュリティの問題がある。これから慎重に考えたい」と話した。また、TWINS改修についても宇川副学長は「今後のTWINS改修では、皆さんの生の意見も取り入れ、より使いやすいシステムにしたいと話した。

懇談会の最後には、西川潔副学長（学生担当）が本懇談会を講評し、「学生が主体となって提案を行っていくことほとても良いことだと思う。今後の活動に期待したい」と激励の言葉で締めくくられた。

茗渓・筑波グランドフェスティバル

宇宙への想い語る

懇親会で世代間交流

東京高等師範学校、東京文理科大学、東京教育大学、筑波大学の卒業生と在学生、教職員が所属や世代を超えて親睦を深める茗渓・筑波グランドフェスティバル（MTGF）が、先月22日、本学大学会館にて行われた。

今回で15回目を迎えるMTGFの今年のテーマは、「想」。桐の葉に積み重ねられてきた想いを共有し、未来の世界への想いを語り合える大会にしたいという願いが込められている。

大学会館ホールでは『宇宙利用の未来、新たな地球観の形成へ向けて』という題目のもと、逢坂卓郎教授（芸術）をメインゲストに、内冨素子さん（JAXA国際部勤務）、上松佐知子准教授（地球進化）をパネリストに迎え、シンポジウムが行われた。

逢坂教授は、国際宇宙ステーション「きぼう」の日本実験棟で制作した無重力アート「Spiral Top」の映像と共に、宇宙環境での芸術についての基調講演を行った。パネルディスカッションでは、観客からの質疑応答もあり、「宇宙人はいるのか」「宇宙人と接触したときに地球人のアイデンティティはどうなるのか」などといった質問が出された。これに対して、逢坂教授は「宇宙は広く、他の生命体が存在する可能性はある。これからは、宇宙へ行くための哲学が必要になってくる」と語った。

シンポジウム後には、大学会館のレストランで懇親会が行われた。卒業生や在学生、教職員らが世代を超えて交流した。参加者には本学が開発した日本酒「桐の華」が振る舞われた。また、本学のYOSAKOIソーランチーム「斬桐舞」や、筑波大学応援部WINSによるパフォーマンスが行われ、会場を大いに盛り上げた。

懇親会の最後には、参加者全員で肩を組み、応援部WINSによる演奏のもと、本学宣揚歌「桐の葉」が合唱された。会場が一体となったこの演奏で参加者は親睦を深めた。

懇親会で「桐の華」の鏡割りをする山田学長ら

自転車シンポ

ゆとりある運転を

学生生活課主催の自転車環境シンポジウムが昨年12月1日、1D204で開かれた。今年はつくば市の担当者も交え、学生、教職員が学内外の自転車交通について活発に意見を交わした。

第一部では全国交通安全協会自転車安全教育推進委員会委員長を務める吉田章教授（スポマネ）が講演。自転車交通の歴史、問題点など日本の特殊な事例を踏まえて、本学の自転車環境を詳細に分析した。また、利用者が互いにルールを守る安心感やマナーを守る爽快感を説き、ゆとりある運転を呼び掛けた。第二部では、学内の自転車問題に取り組む学生や施設課、支援室、市の交通政策担当者が登壇し、パネルディスカッションを行った。駐輪場など現状のデータ、学内外の今後の整備計画、提案など内容は多岐にわたり、その後の質疑応答の時間をより濃いものにした。

参加した菊田尚人さん（日目1年）は「なかなか知る機会がない情報が多く参考になった」と振り返った。主催した学生生活課の土子昇さんは「時間を超過してしまったが、そのぶん面白い議論ができた。機会があったら学生も積極的に参加してほしい」と全学的な関心を促した。

学生論壇

社会への声

問題残る条例改正案

昨年12月15日、「東京都青少年健全育成条例改正案」が都議会本会議で可決した。「非実在青少年」という表現も話題に上り、賛成・反対双方の意見が広く展開した。だが、十分な議論が成されないまま可決された当改正案には問題点も多い。多種多様な立場にある人々の議論があるが、今回は1つの意見を述べたい。

まず「表現の自主規制」と販売に関して。今回新たに規制対象として用いられることになった表現に、7条2項で「刑罰法規に触れる」性的な行為、近親者間の性行為とされたが、これは元々の描写規制から内容規制への移行を示しており、また有害図書指定の要件として8条2項に示された「強姦等の著しく社会規範に反する性交または・・・」と合わせて考えればどんな内容であってもその解釈次第で都合よく不健全図書として規制される可能性を示唆している。これが作家の自主規制を促すことになると考えるのは不自然なことではない。また以前の「いたずらに性欲を刺激する」から「社会規範に反する」と文言が変化したことは「性」から「社会道徳」への対象の変化であり、法的モラリズムの見解でいえば個人の自由への干渉とも言える。この不健全図書を指定する団体は「青少年健全育成審議会」であり、この代表者は都が指定する。この審議会の委員任命、委嘱、これまでの実態に関しての意見は曖昧するが、「宝島社裁判」の一件もあり、たとえ出版業界の人物が一委員になるとしても、この運用について嫌疑が生まれるのは当然だろう。

では子供との関わりを考えよう。一番上がるのが「ゾーニング」の問題だ。様々な人がいる社会では感情も多様化する。同じ文脈から受け取る感情は当然個人に帰する。憲法の精神的自由や、刑法175条との関わり、人権内在説と人権外在説を考えると非常に多面的な問題である。さて、わいせつな文章や図画の頒布などを禁止している刑法175条で扱われない現在規制対象となりうる図書において、表現自体を規制することで得られる「法益」は存在するだろうか。「強力効果説」の否定と、メディアの影響が受容環境によることを考えれば、青少年に対してはそもそも表現規制ではなく受容環境の制御とそがベターだと言える。ならばゾーニングの徹底こそ行うべきではないか。

非常に広範に渡る問題を内包した当条例改正案であるが、個人としては現実よりも大きな領域である表現の分野が不当に狭まることが無いことを祈る。（現代視覚文化研究会・大田原康裕＝知識図書2年）

学生宿舎に留学生急増

日本人、継続入居は狭き門

数は増えても交流は増えず

コミュニティ作りが課題

1年生の約6割が入居する本学の学生宿舎。賃料の安さから学生生活の助けとなり、さらに学類を超えた友人づくりに役立っている。だが、表からはなかなか見えないその内部では大きな変化が起きている。

その変化とは宿舎に住む日本人学生と留学生の割合だ。（上グラフ参照）平成17－20年度では宿舎入居者は8割が日本人学生だった。しかし、平成21年度では7割を切り、今年度は6割まで低下した。数年後には5割を下回ることが見込まれる。学生生活課専門職員の福富明子さんは「改修工事の影響で定員自体が減っている影響もある。ただ、入居を希望する留学生や新入生はほぼ全員受入れるというのが現在の大学の方針」と話す。

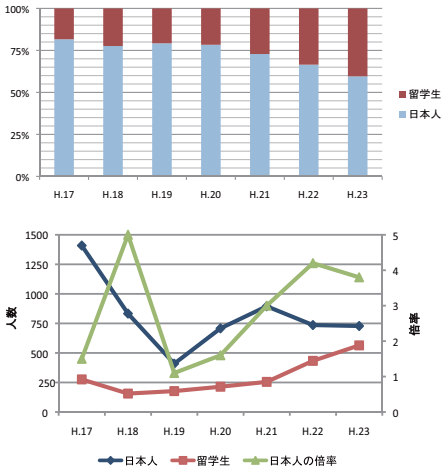
これは平成21年度から始まった国際化拠点整備事業（G30）による留学生受け入れ数の増加によるところが大きい。本学は留学生の数（22年度12月時点で1944人）を32年度末までに4500人に増やすことを目標に掲げている。

留学生にとっては、大学宿舎は助けになる。中国からの留学生の李慶華さん（社シス）は「バス停にも近く、安いのがいいところ」と話す。

しかし、G30による留学生の増加と改修工事計画が重なったことで、継続入居を希望する日本人学生が影響を受けている。（下グラフ参照）平成20年度までは、アスベスト除去工事があった18年度を除き、継続入居の倍率は1－1・5倍だった。だが、G30と改修工事が始まった21年度は3倍、本年度は4倍を超えた。ただし、従来から大学は日本人で経済的に苦しい等の特別事情の入居枠を180人ほど確保している。だが、必ずしも十分とは言えない。来年度からアパート暮らしをする福田康さん（応理1年）は「経済的にちょっときつい。エアコンなどの電気代が不安」と話す。

大学は先月、将来に向けた宿舎のあり方を考える砂宿舎に住む若井悠太さん（社学1年）は「留学生とはあまり交流がない。そもそも構造的に交流できるようなスペースがない」と話す。また、中国からの研究生の張杰さん（持続環境）は「交流をしたいがチャンスがない。東工大ではパーティーなどをやっているが、筑波大ではそういうこともない」と話す。

大学も日本人学生と留学生の間であまり交流がないことは理解している。マナーが悪く、補食室や共用スペースが汚く使われてしまうのだという。そのため、大学では来年度から試行的にコミュニティリーダー制を取り入れる。リーダーをまとめ役に、学生間に自然と横のつながりが作られるのが狙いだ。福富さんは「改修棟には共有スペースを設けている。コミュニティが学生とも話し合いを進めていく必要があるだろう。



上：日本人と留学生の入居割合の推移（23年度は見込み）、下：日本人と留学生の継続入居者数、及び日本人の継続入居の倍率の推移（18年度はアスベスト除去工事で募集数が大幅に減った影響）（学生生活課調べ）

第1回TSUKUBA新まつり

参加交流型の祭り開催

つくば地域をより元気に

本学生が中心となって企画する第1回TSUKUBA新まつり（主催＝TSUKUBA新まつり実行委員会、共催＝つくばよさこいソーラン合同チーム、筑波桐陵など）が、3月13日の11－19時につくばセンター地区で開催される予定だ。

学生と地域住民のつながりを深め、つくば地域をより元気にすることが目的。地域住民にも広く参加を呼び掛けて準備を進めている。

当日は、よさこいソーランや神輿、太鼓、プラスバンドの発表、大道芸やヒーローショーなど、さまざまな企画が行われる。また、来場者が踊りに参加したり、楽器の演奏に挑戦してもらったりするなど、参加型の交流型の祭りであることも特長だ。

代表の守屋俊甫さん（体育2年）は「学生と地域住民の交流をコンセプトとして、参加型のお祭りを開催します。老いも若きも関係ない、このお祭り空間に来場し、思う存分楽しんでください」と意気込みを語った。

問い合わせ＝080・5093・9558（守屋）、info@nevt.kb.com

護身術講座

県警の講師招き 防犯意識学ぶ

本学生の防犯意識の向上を目的としたIACT企画「学生のための護身術講座」が昨年12月1日、大学会館特別会議室で開催された。学生相談室のカウンセラーや学生生活課の職員が中心となって開いた同企画に、本学生・職員など約20人が参加した。

今回の企画では、始めにつくば中央警察署員の方による防犯に関する講演が行われた。講演の中で、本学周辺では特に性犯罪が多く発生しており、自分の身は自分で守るという意識の必要性が説かれた。また、福岡県警の「性犯罪防犯広報DVD」を視聴し、「自宅に帰るときは周囲を確認してから鍵を開け、入ったらすぐ閉める」など、防犯意識について学んだ。

最後に、茨城県警察本部の方の指導のもと、護身術を実践した。腕をつかまれたときに自分の腕を固定するなどして無理なく離すコツを伝授され、戸惑いながらも実践する参加者の姿が見られた。

プランナーで学生相談室カウンセラーの寺島瞳さんは「深夜に一人で出歩かないなど、防犯意識を高めてほしい」と語った。

劇団筑波竹蜻蛉冬公演

世界観で魅了

劇団竹蜻蛉の第163回冬公演「昨日誰かに会った気がするが気のせいだったかもしれない」が、昨年12月18、19日に2A411で行われた。この公演は毎年冬に行われている恒例のものであり、演技だけではなく、脚本から演出まで全て劇団員の手によって行われる。

今回の劇は、アンドロイドの研究施設にやってきた少女の身に起こる不思議な経験を描いたSF風のストーリー。役者の演技だけでなく照明や音響、衣装などにもこだわり、普通の世界からは少しずれた独特の世界観を表現して、客を魅了した。

初めて脚本・演出を担当したという吉川由李子さん（情報創成2年）は、「夏休みから企画を行って来て、初めて演劇を見る人も楽しめるような演劇を意識して創り上げた。代替わり後初めての演劇だったため苦労する所も多かったが満足行く劇に仕上げることが出来て良かった」と笑顔を見せた。

強盗事件

夜道に注意 犯人逃走中

本学大学院生の女性が昨年12月23日深夜、球技体育館西側のペデストリアンで、後ろから来た男に襲われ、ショルダーバックに入っていたカードケースを盗まれた。けがは無かった。カードケースの中には学生証や運転免許証などが入っていた。犯人は逃走し、まだ捕まっていない。

男は30代と見られ、身長は約170㎝で、犯行当日は黒いジャンパーを着用していた。

学生生活課は「夜道を歩くときは1人で歩かないように。今回の強盗事件を他人事とは思わずに、防犯グッズを携帯するなど、防犯意識を持つように心がけてもらいたい」と呼びかけている。

犯人に関する目撃情報は、警察または大学まで。

応援部WINS

新しい応援のカタチを模索

大学応援団桐葉」という2つの組織から発展し、「筑波大学を元気にする」というモットーの下、2007年にWINSは創設された。時とともに衰退した前組織の反省を活かし、WINSは新しい応援の形を日々模索している。

WINSの応援には厳格さがない。使用する曲は代々受け継がれてきた応援歌から流行りの曲までなんでもこなす。アンサンブルでも激しく身体を動かし、チアリーダーは観客席を走り回り、リーダーに合わせて全員で声を張り上げる。そして常に皆が笑顔で楽しげだ。その姿を見ていると、応援というよりもパフォーマンスを見ているようで、見る者を非常に楽しげな雰囲気だけでなく、芯が一本通った印象を受けるのも、こういった日々の練習や反省の積み重ねによるものなのだろう。「先輩方が学年の上下間の隔たりのない応援団の姿を作ってくださった。部員一人ひとりが互いを尊重する姿勢を大事にしている」と主将を務める柏野全潤さん（人文2年）は語る。

現在、WINSは一部の部活の試合や雙峰祭、やどかり祭などのイベントに出向き応援を行っている。今後は学内での認知度の向上と応援へ出向く回数を増やしていくことが目標だ。学内の至る所でWINSの新しい「応援」を聞くことが出来るようになる日もそう遠くないかもしれない。

（本紙・宮崎裕多加＝社会学類）

応援団と聞いて、あなたはどんな姿を思い浮かべるだろうか。詰め襟の黒い学生服でハチマキをした男子学生が一矢乱れぬ姿で声を張り上げ腕を振る。しかし、筑波大学応援団WINSの応援はそんなイメージの応援とは全く異なる。

前身として存在していた「筑波大学応援団」とそれを引き継いだ「筑波

あるく探訪 tanbo

高野切本古今和歌集
復元は　年の集大成

本学芸術学系書コースの学生、卒業生、修了生が18年かけて完成させた「高野切本古今和歌集」の復元全巻完成記念展が、2月8―13日に総合交流会館多目的ホールで行われる。

「高野切本古今集」は、11世紀半ばに3人の能書家により書写されたもので、現存最古の「古今和歌集」の写本である。全20巻のうち、現存するものは完本3巻とわずかな部分のみであったが、芸術学系書コースの学生、卒業生、修了生によって全巻が復元された。

開催時間は午前9時―午後6時まで。最終日は午後3時まで。問い合わせ＝029・853・2716（森岡隆教授・芸術）

エコサイクル
不要家具を新入生へ

「3R＋1EcoCycle10―11」が卒業、引っ越しシーズンに合わせ家具、家電を募集する。卒業生や教員から不要になった家具、家電を引き取り、新入生に提供する。対象物品は冷蔵庫、こたつ、カラーボックスなどの家具、家電。また、木ブロック、突っ張り棒、食器などの生活雑貨。汚れや破損のある物は引き取れない場合もある。

回収は砂・一ノ矢の共用棟に持ち込むか、訪問回収。ただし、訪問回収はホームページからの事前申し込みが必要。回収日時は2月12日、3月11、12、16、17、20、21、22、26、27、28日の午前9時―午後4時。ホームページ＝http://www.ecocycle-tsukuba.net/

Who's Who?

「Has-key」から世界を変えていく
堀本貴幸 さん（情科2年）

共に前を見据える、堀本さん（右）と倉世古さん

日本製の信頼回復へ
「何かやろうや！」、響く毎日

とある昼下がり。賑わう3学食堂。「今何かやりたいことはあるんですか」と筆者。「やりたいことがあれば、もうやってますよ！」と堀本貴幸（情科2年）さんは笑う。昨年の年末から始まったTOEICセミナーもそんな彼の一言から始まった。

「学校で授業を受けているだけだと、体がうずうずするんですよね」と彼は話す。そんな彼が最も興味を持つのはコンピュータの世界だ。

堀本さんは、ユーザーがソフトウェアの使用環境を選べないことに危機感を抱いていた。「ソフトウェアの改変、配布は自由であるべき」。そう感じた彼が注目したのは、OSの基盤となるソフトウェアで、ユーザーによる改変が自由なLinux。Linuxに将来性を感じた彼は、本学入学後わずか3週間で、Linuxについて学習する団体、「つくらぐ」を立ち上げた。月に1回勉強会を開き、互いに意見を交換し、共有し合う。

昨年の5月には、フリーソフトの推進を目的にソフトウェア開発を行う「Has―key」を立ち上げた。きっかけは、堀本さんが、同じ学類の友人、倉世古恭平さん（同）にかけた「何か面白いことをやろうや！」という言葉。「大学に頼らずに、自分たちだけで何が出来るか試したかった」と活動を始めた理由を話す。

彼らが開発したソフトの1つにTweetWa1kがある。この事業は、「ツイッターが好きな人に朗報！」というキャッチで企業の広告をツイートする専属のスタッフを全国から募集。彼らが、契約を結んだ企業の考え方を学び、ツイートのプロとして企業の広告活動をサポートするものだ。

将来的に参入を目指すのは、iPadやスマートフォンなど普及が進む電子書籍関連の事業。この事業では、Web上で誰もが気軽に電子書籍を編集できる環境を提供し、出来上がった書籍をWeb上で販売する。いわば出版社と書店をHas―keyが一括して行おうというものだ。

「常に未来を意識する事業でありたい」と話す堀本さん。高校2年までシンガポールで暮らしていた彼は「長引く不況と経済の衰退で、日本製品の評価が揺らいでいるように感じる」と嘆く。「世界で広く受け入れられるようなソフトウェアを開発し、Made in Japanを再構築する」。それが彼の目標だ。

約9カ月間の活動を振り返り「自分1人じゃやっぱり出来ない。他のメンバーの助けがあってのHas―keyなんですよね」。そう話す彼は、他のメンバーにこまめに連絡することを忘れない。そんな彼を倉世古さんは「これでも彼はあがり症で、意外と不器用なところがあるんですよね。でも、彼は心が折れても再生する体力があるんです」と評価する。

何事にも積極的に取り組む堀本さんだが、その裏には、「いつまでも、強い知的好奇心を忘れてはいけない」という意識がある。「何かやろうや！」。今日も、そして明日も堀本さんの声が学内のどこかで響く。（本紙・加藤茂行＝地球学類）

うちわ話
☆引退記者からひとこと☆

毎週月曜の編集会議の出来で、私の1週間は決まる。編集期間は、編集室が私の住みか。徹夜続きのストレスは全部、後輩いじりで発散してた。唯一の希望はイケメンと出会える期待を持つこと。それはさておき、個性的で素敵な人達に出会えた3年間だった。いろいろ乗り越えて神経的にも体型的にもすっかり図太く成長したな。わがままでマイペースな先輩でしたが私はとっても楽しかったよ☆ありがとう（のんべぇレッド）

美味しい煙を吸い始めた頃から、肌のくすみが気になり始めた。それでも編集室に行く時はスッピン。なぜって？私は部員に甘えてたから。今まで甘やかせてくれてありがとう。これからは、自分にも、自分の肌にも真剣に向き合おうかな。（肉食ブルー）

今となっては「裏番長」なんて呼ばれているけど、初取材は1時間遅刻。講演会の主催者の方に、講演録音したMDを送ってもらい、涙目で原稿を書きました……人ってどう成長するか分からない（笑）大学新聞の肩書を名乗って、多くの人に様々な話を聞いて、一つ一つの出来事が刺激となって、今の私がいます。先生、広報室の方々、部員のみんな、出会ったすべての人に感謝です。（裏バンピング）

編集期間にもなってまだ原稿を書いていない。何度となくこのピンチに対面してきたが、この時ほど自分の無力さを思い知る。もう嫌だと何度も思ったが（逃げた事も、3年間続けた。それはただ「出会い」があったからこそ。みんなで食べる牛丼こそ全ての始まりだ。（ひりっPイエロー）

来月3月でつくば生活一周年。筑波大学新聞生活は285号から前号のちょうど半年間。まだまだ「つくば人」としては半人前だけど、その辺の人よりもつくば人になったハズ。学ぶことばかりで、何も残していない学年だけは先輩の私だけど、青春をありがとう！（おしりべんべんグリーン）

初仕事はエアコンの整備。取材・執筆と同じくらいの時間を編集室の機材の整備にかける気がする。独自調査を基にした紙面のキャップも経験出来た。今後も独自ネタを発表出来る大学新聞であってほしい。頑張れ後輩諸君。そしてありがとう。（常駐ブラック）

次号は
4月7日（水）
発行予定です

筑波自然図鑑

◇ヘビトンボ◇
撮影地＝宝鏡山

日本の渓流に棲む昆虫の中では最も大きい種である。大顎が発達しており、他の昆虫を捕食する。噛まれるととても痛いので素手で触るのは危険。この昆虫はきれいな水の指標生物であり、生息している場所の環境の良さを象徴している。東北地方などでは「マゴタロウムシ」と呼ばれ、栄養豊富なので食用にされている。（写真・文＝松尾恵梨子、生物2年、野生動物研究会）

催事

◆芸専卒業制作展

平成22年度芸術専門学群卒業制作展と博士前期課程芸術専攻修了制作展が、2月20日まで茨城県つくば美術館（つくば市吾妻）で開催されている。2月6日まで前期の卒業制作展（芸術学、美術）が、8―13日は後期の卒業制作展（構成、デザイン）が行われる。また、15―20日は修了制作展が行われる。

開館時間は午前9時半―午後5時まで。6、12、20日は午後3時まで開館。入館はいずれも閉館の30分前まで。月曜休館。ホームページ＝http://www.geijutsu.tsukuba.ac.jp/sotsuten/

◆応募書類作成セミナー・面接練習会

男女共同参画推進室が、2月9日にD棟3階の学生生活支援室で「博士学生、任期付き教員・研究員のための応募書類作成セミナー・面接練習会」を開催する。午前10時30分―午後2時30分まで。先着8名。問い合わせ＝geo@un.tsukuba.ac.jp

筑波大学出版会 近刊案内
気概と行動の教育者 嘉納治五郎
生誕150周年記念出版委員会編

今やグローバルスタンダードになった柔道の創始者として知られる嘉納治五郎は、明治～大正期の教育改革に貢献した偉大な教育者でもあった。嘉納は高等師範学校・東京高等師範学校の校長を3期23年間務め、柔道のみならずスポーツの普及、留学生の受け入れ、オリンピックの招致などに尽力した。本書は気概と行動の教育者嘉納治五郎の実像に迫り、そのレガシー継承の指針を探る。

執筆者は、柔道研究者に加え教育史やスポーツ史の専門家など、本学教員を中心とした15名。3月上旬刊行予定。価格未定。

大学会館書籍部ベストセラー

1	ノルウェイの森（下）　村上春樹/講談社文庫
2	KAGEROU　斎藤智裕/ポプラ社
3	'12　就職四季報　総合版　東洋経済新報
4	ノルウェイの森（上）　村上春樹/講談社文庫
5	'12　「Webテスト」完全突破法　SPIノートの会/洋泉社
6	ゴールデンスランパー　伊坂幸太郎/新潮社文庫
7	'12　これが本当のSPI2だ!　SPIノートの会/洋泉社
8	もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら　岩崎夏海/ダイヤモンド社
9	これからの「正義」の話をしよう　マイケル・サンデル/早川書房
10	'12　朝日キーワード　朝日新聞社

松山ケンイチ主演の映画化が話題になった村上春樹の「ノルウェイの森（上/下）」が、1位と4位にランクイン。元俳優の斎藤智裕（水島ヒロ）の処女作「KAGEROU」の売り上げも好調だ。

また、マイケル・サンデルによる「これからの『正義』の話をしよう」は7カ月連続のランクイン。根強い人気がうかがえる。

今月の催事は、4月始まり手帳フェア。